

2025 年度後期 学修成果アンケートの結果と考察

はじめに

本学では 2021 年度から全ての学部学科専攻においてディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミSSION・ポリシーのいわゆる三ポリシーの見直し作業を行い、アセスメント・プランを整備した。その流れの中で、学生のディプロマ・ポリシーに対する到達度を測定し、適切な形成的評価を加えることによって、学生の学修成果を担保する取り組みが必要とされている。これは同時に、学生の学修成果をもとに各ポリシーや具体的なカリキュラム、さらには各授業科目の改善を進めることとなる。

このような状況の下、本学では 2022 年度前期に、新ポリシーにもとづく学修成果を把握するためのループブリックの整備を行った。今学期末も「学修成果アンケート」を実施した。本アンケートは、学生が所属学科のディプロマ・ポリシーの各項目についてカリキュラムループブリックを用いて、自らの到達度を自己評価するものであり、学生の主観的な評価のみが反映されている。そのため、評価のエビデンスとなるパフォーマンスや評価水準について学生と教員に大きな差が見受けられる。これらの差は、学科単位、あるいは全学的なカリキュラムループブリックの調整に必要な情報であり、カリキュラムループブリックによる学修成果の可視化の第一段階として多くの示唆を提供するものである。

1 アンケート概要

在籍者数 2314 名に対して 999 件であり、回答率は 35.50%であった。各学科、学年ごとの回答数、回答率は以下の表に示すとおりである。

学科	1年	回答数	回答率	2年	回答数	回答率	3年	回答数	回答率	4年	回答数	回答率	計	回答数	回答率
現代ビジネス学科	103	17	16.50	82	5	6.10	102	6	5.88	104	7	6.73	391	35	8.95
教育学科 幼児教育専攻	69	35	50.72	74	29	39.19	82	32	39.02	100	82	82.00	325	178	54.77
教育学科 児童教育専攻	40	24	60.00	38	25	65.79	41	20	48.78	60	44	73.33	179	113	63.13
教育学科 健康教育専攻	51	14	27.45	47	7	14.89	47	16	34.04	42	9	21.43	187	46	24.60
食品栄養学科	105	22	20.95	110	24	21.82	105	21	20.00	104	27	25.96	424	94	22.17
生活文化デザイン学科	27	15	55.56	40	9	22.50	69	15	21.74	55	16	29.09	191	55	28.80
日本文学科	88	32	36.36	76	24	31.58	109	21	19.27	93	47	50.54	366	124	33.88
英文学科	40	12	30.00	49	12	24.49	40	7	17.50	56	10	17.86	185	41	22.16
人間文化学科	33	12	36.36	60	8	13.33	35	8	22.86	50	11	22.00	178	39	21.91
心理行動科学科	87	74	85.06	92	80	86.96	76	59	77.63	75	54	72.00	330	267	80.91
音楽科	14	6	42.86	15	0	0.00	16	0	0.00	13	1	7.69	58	7	12.07
計	657	263	40.03	683	223	32.65	722	205	28.39	752	308	40.96	2814	999	35.50

①1年生・2年生の学科固有 DP について

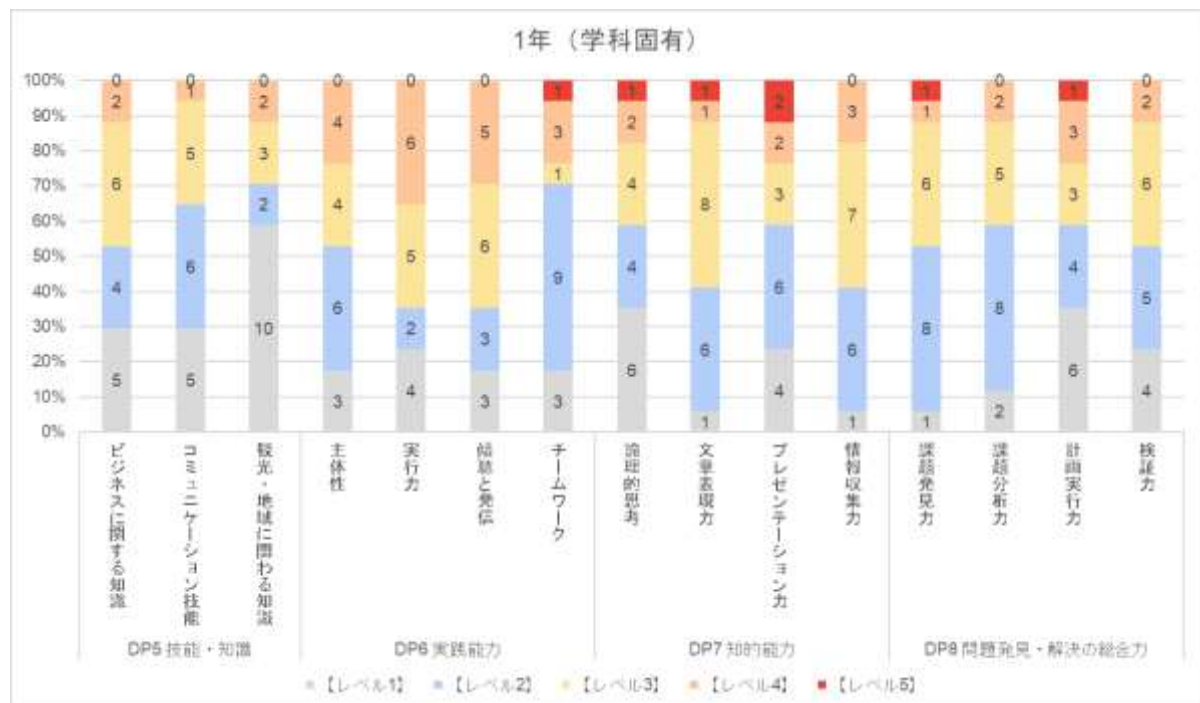


図 1. 2025 年度 1 年生の学科固有 DP の結果 (n=17)

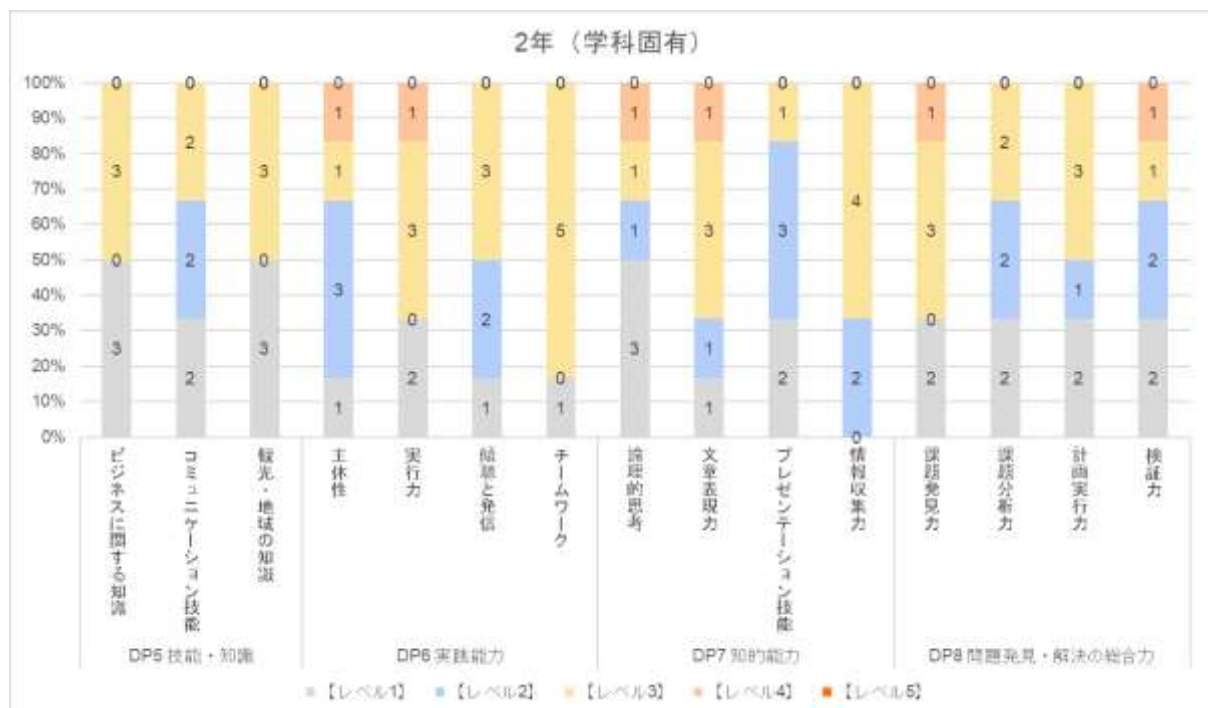


図 2. 2025 年度 2 年生の学科固有 DP の結果 (n=6)

学科固有の DP に関する学修評価については、1 年生よりも 2 年生の方がすべての項目において平均スコアが低い結果となった（1 年：2 年=2.77:2.26）。この要因の一つとして、2 年次生のサンプル数が少ないため、結果に偏りが生じていることが考えられる。

両学年とも DP5 に関するスコアは低くなっているのは、まだ専門科目を十分に履修していないことに起因すると考えられる。一方で、DP6 に関するスコアは両学年とも他の項目に比べ平均スコアが高い結果となった。これは 1 年次からビジネスレディネスやビジネス基礎演習、2 年次からのゼミナールを通じて実践的な取り組みを行っている成果といえよう。また、両学年とも、DP7 の文章表現力、情報収集力、DP8 の課題発見力が平均より高いスコアである（1 年生は DP7 のプレゼン能力も平均より高い）。基本的な能力は修得していることは認められるが、やや偏りのある結果となっていることから、一般教育科目と専門科目によって修得する能力のバランスを考慮したカリキュラムの構築が必要であると考えられる。

②1 年生・2 年生の一般教育 DP について

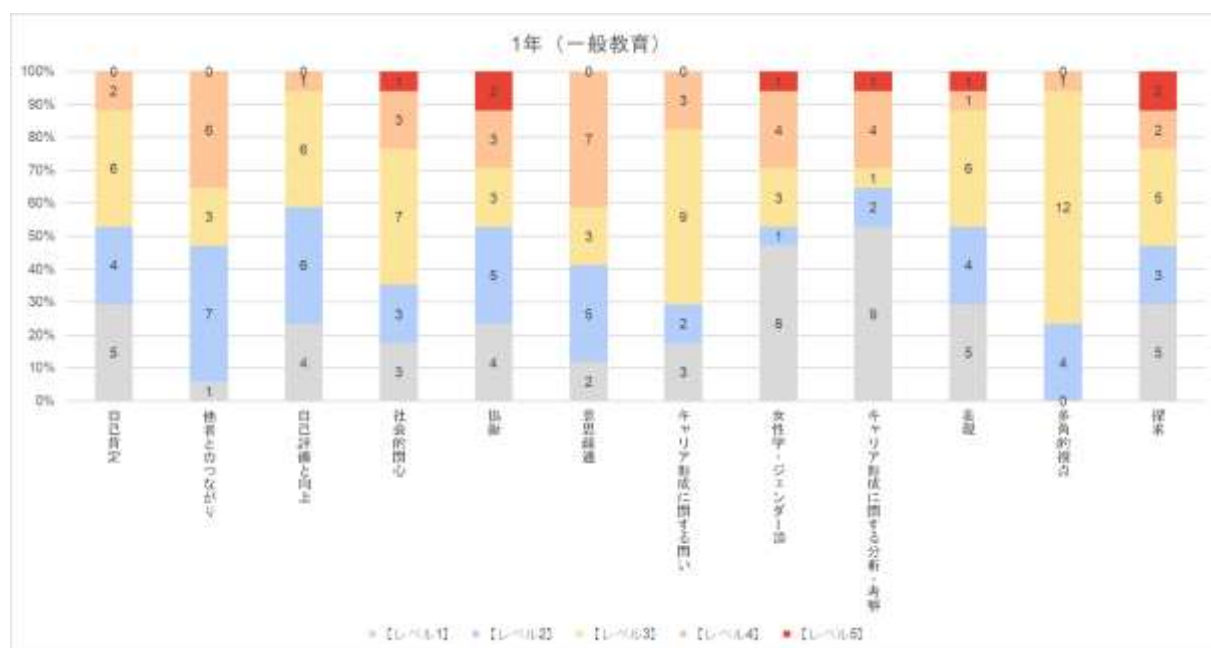


図 3. 2025 年度 1 年生の一般教育 DP の結果（n=17）

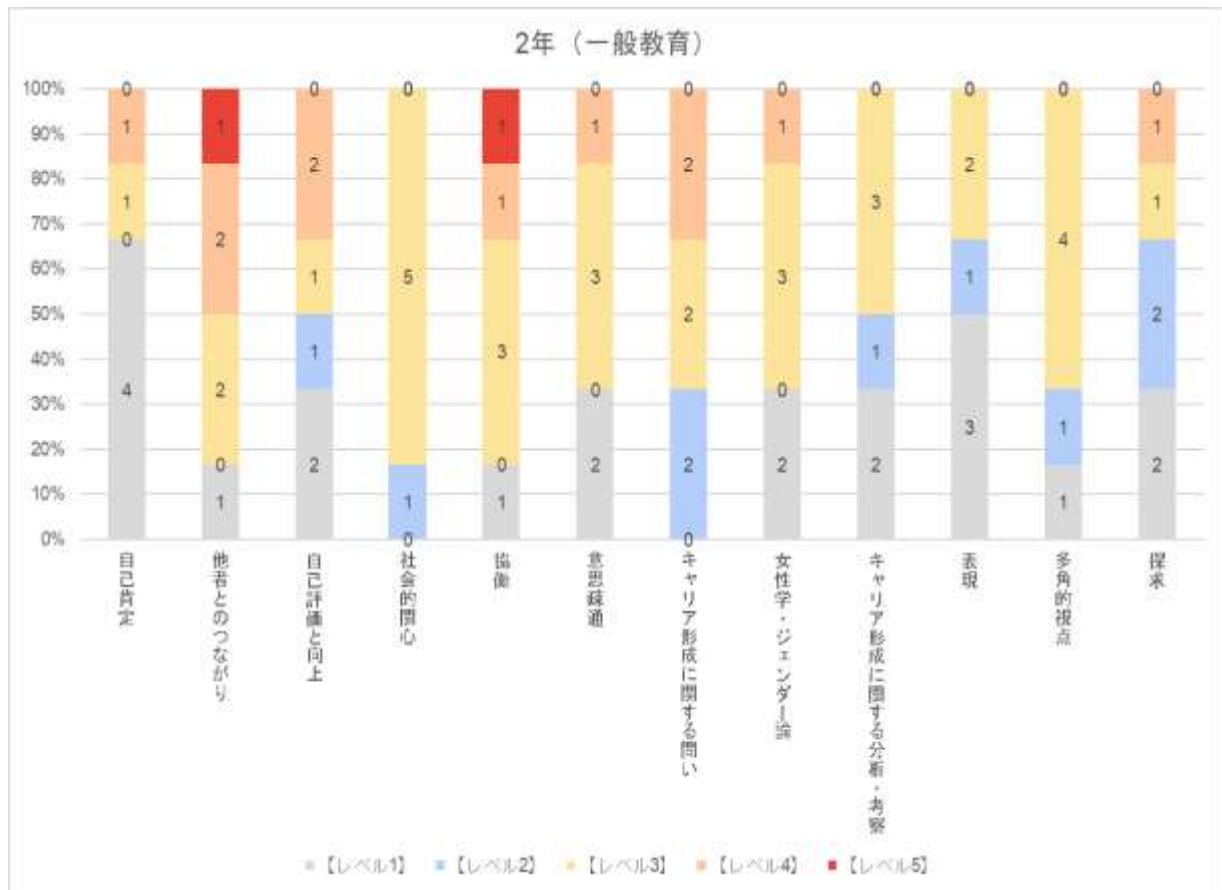


図 4. 2025 年度 2 年生の一般教育 DP の結果（n=6）

1 年生の平均スコアは 2.55、2 年生の平均スコアは 2.53 となり、大きな隔たりは無かった。両学年とも、「他社とのつながり」「社会的関心」「女性の生き方・キャリア形成に関する問いの設定」が平均より高いスコアとなっている。これは、コミュニケーションやキャリアといったビジネスに関係する領域に興味関心の高い本学科の学生の特徴を示していると言えよう。一方で、「自己肯定」と「女性の生き方・キャリア形成に関する分析・考察」に関しては低いスコアである。自己の分析および考察といった、これまでより一歩進んだ思考力を強化するための教育を早い段階で行う必要があることが示唆される。

③3年生・4年生の学科固有 DP について

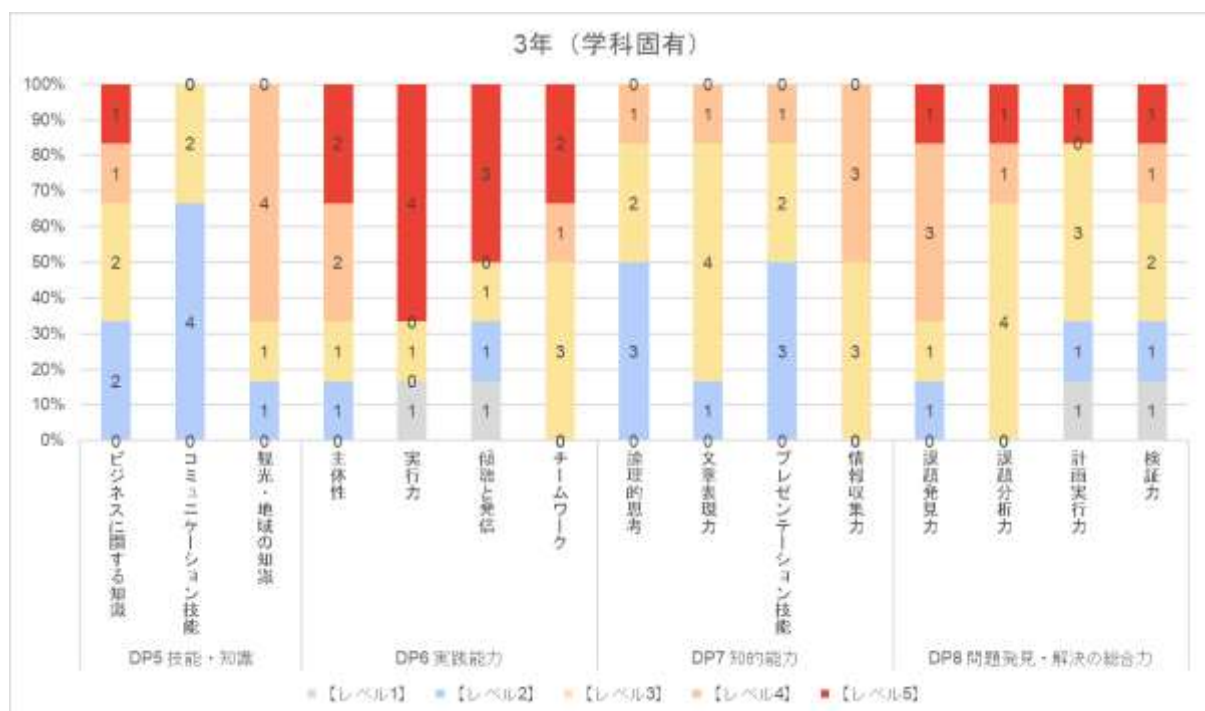


図 5. 2025 年度 3 年生の学科固有 DP の結果 (n=6)

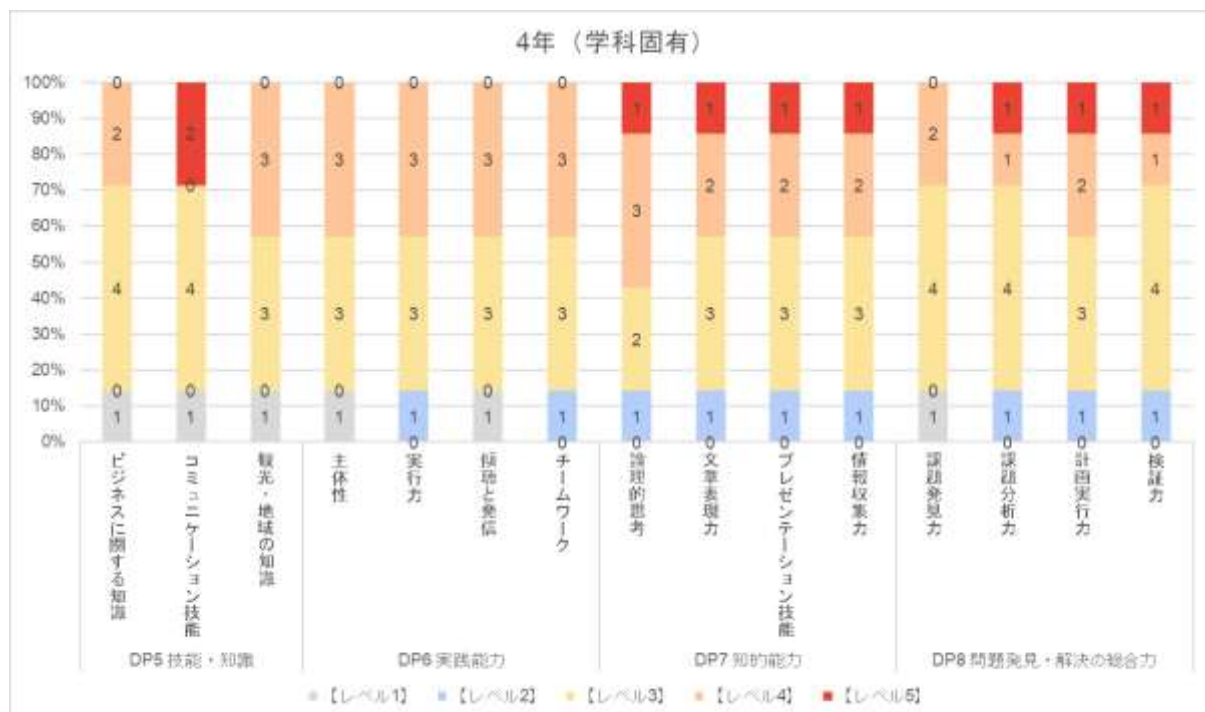


図 6. 2025 年度 4 年生の学科固有 DP の結果 (n=7)

3年生の平均スコアは3.27、4年生の平均スコアは3.28となっており、この両学年の平均スコアの差はほとんど無いが、1年生・2年生と比べて高くなっていることから、学科教育による能力の向上が確認される。また、3年生においてはDP6の実践能力全般、とりわけ実行力が高いことは本学科の実践的な取り組みの成果といえよう。また、4年生においてはDP7の知的能力全般、とりわけ論理的思考力が平均的に最も高いスコアとなっている。これは、卒業論文執筆を通じた指導の中で培われる能力である。一方で4年生においてDP6の平均が3年生より低くなっていることなどから、今回の結果は各年度の学生の質に依存する部分もあると考えられるため、1年次・2年次においては基礎的な技能・知識を獲得し、3年次において実践能力を磨き、4年次において知的能力と総合力を確実なものにできたと実感できるカリキュラム・教育体制の構築をする必要がある。

④3年生・4年生の一般教育 DP について

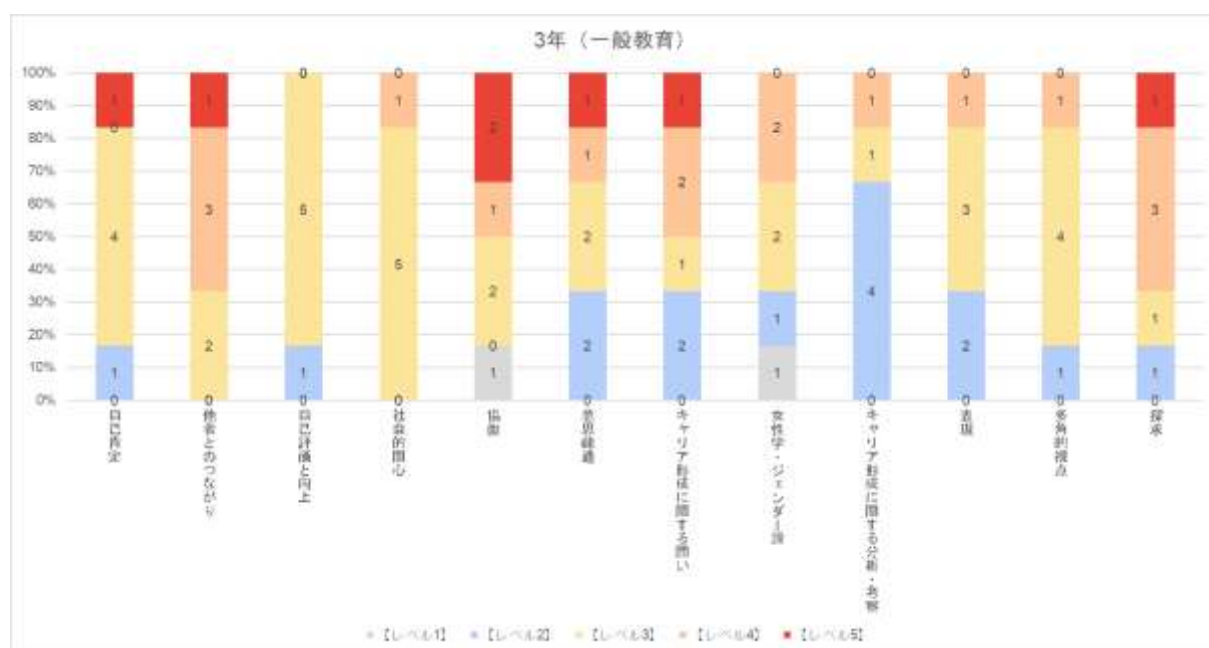


図 7. 2025 年度 3 年生の一般教育 DP の結果 (n=6)

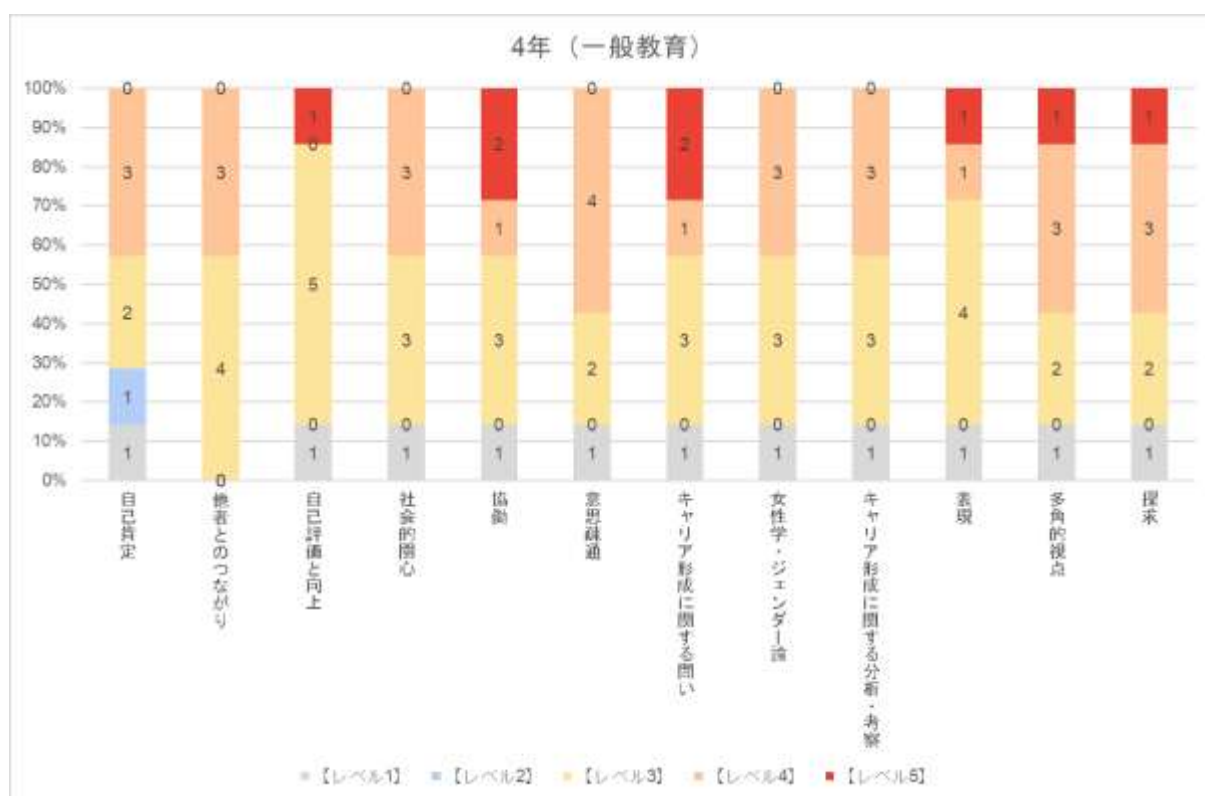


図 8. 2025 年度 4 年生の一般教育 DP の結果（n=7）

3 年生の平均スコアは 3.15、4 年生の平均スコアは 3.25 となっており、学年が上がるとともに一般教育に関する全般的な能力が向上していることが確認できる（4 年生はすべての項目で平均 3.0 を上回っている）。特に大きな差が出ているのは、「女性の生き方・キャリア形成に関する分析・考察」と「多角的視点」である。これは、4 年生は実際に就職活動などを通じて、自らの卒業後の進路を決める経験をし、その中で様々な意見に向き合った経験によるものと考えられる。このことから、「社会に出て生きることのリアルな体験」は、これらの能力を伸ばす大きな要因であり、どのようにカリキュラムへの落とし込むことができるか、引き続き検討を重ねることとしたい。

幼児教育専攻の2025年度1年生の回答者数は35名、回答率は50.7%であった。2025年度1年生の自己評価を図1に示した。「自己肯定」「他者とのつながり」「自己評価と向上」「協働」「意思疎通」以外の項目において、レベル3以下の学生が8割を超えていた。とりわけ「女性の生き方 キャリア形成に関する分析・考察」「表現」「教育学に関する技能」「保育学に関する技能」「聞く・話す・観察する・表現する能力」「計画を立て実行する能力」「総合的な能力に基づき保育を実践する能力」「子どもをめぐる社会課題の把握・分析・評価」「子どもをめぐる社会課題の探求」「子どもをめぐる地域環境への介入」においては、レベル2以下の学生が6割を超えていたことから、これらの項目については特に自己評価が低かったことが伺える。

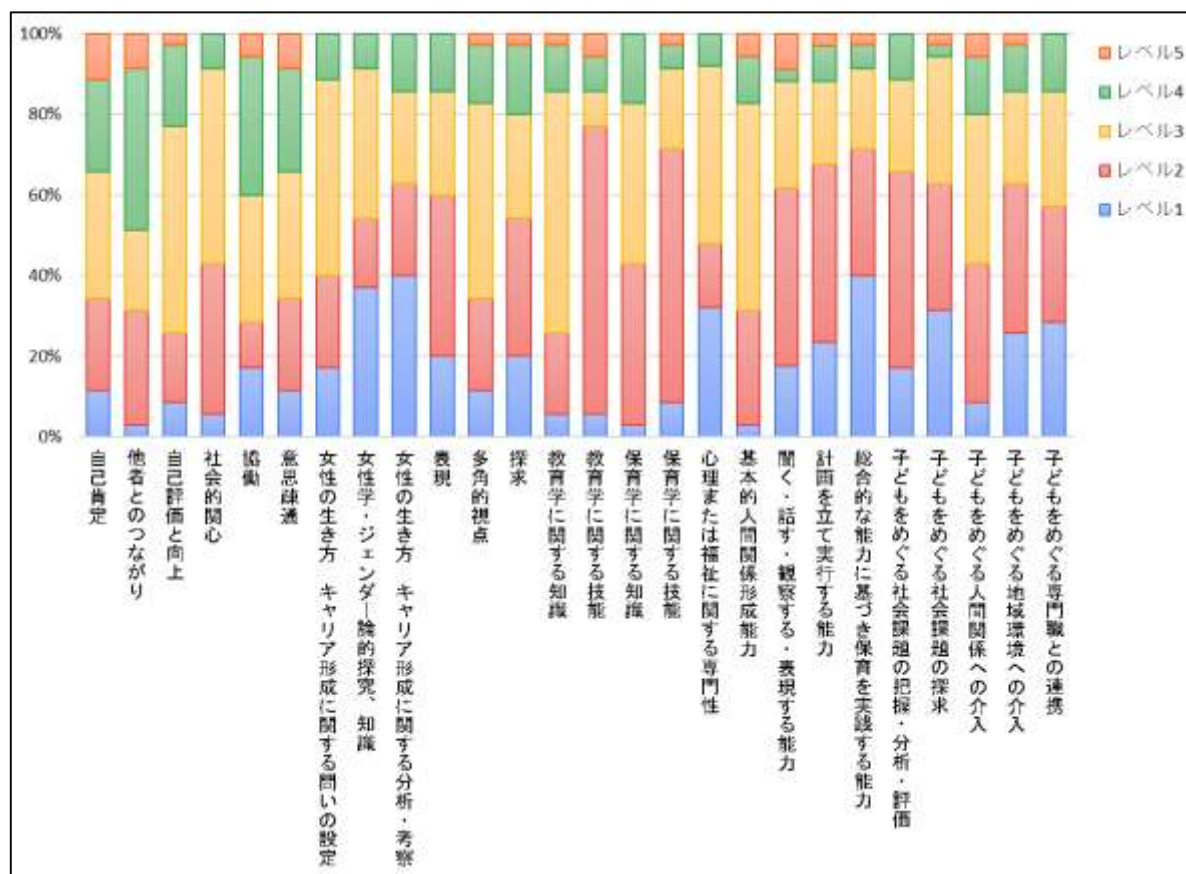


図1 2025年度1年生の結果 (n=35)

2025 年度 2 年生の回答者数は 29 名、回答率は 38.2%であった。2025 年度 2 年生の自己評価を図 2 に示した。2 年生においても、多くの項目でレベル 3 以下の学生が 8 割を超えており、レベル 2 以下の学生が 6 割を超えている項目が 6 項目と依然として多かったことから、自己評価の低い学生が多いことが伺える。

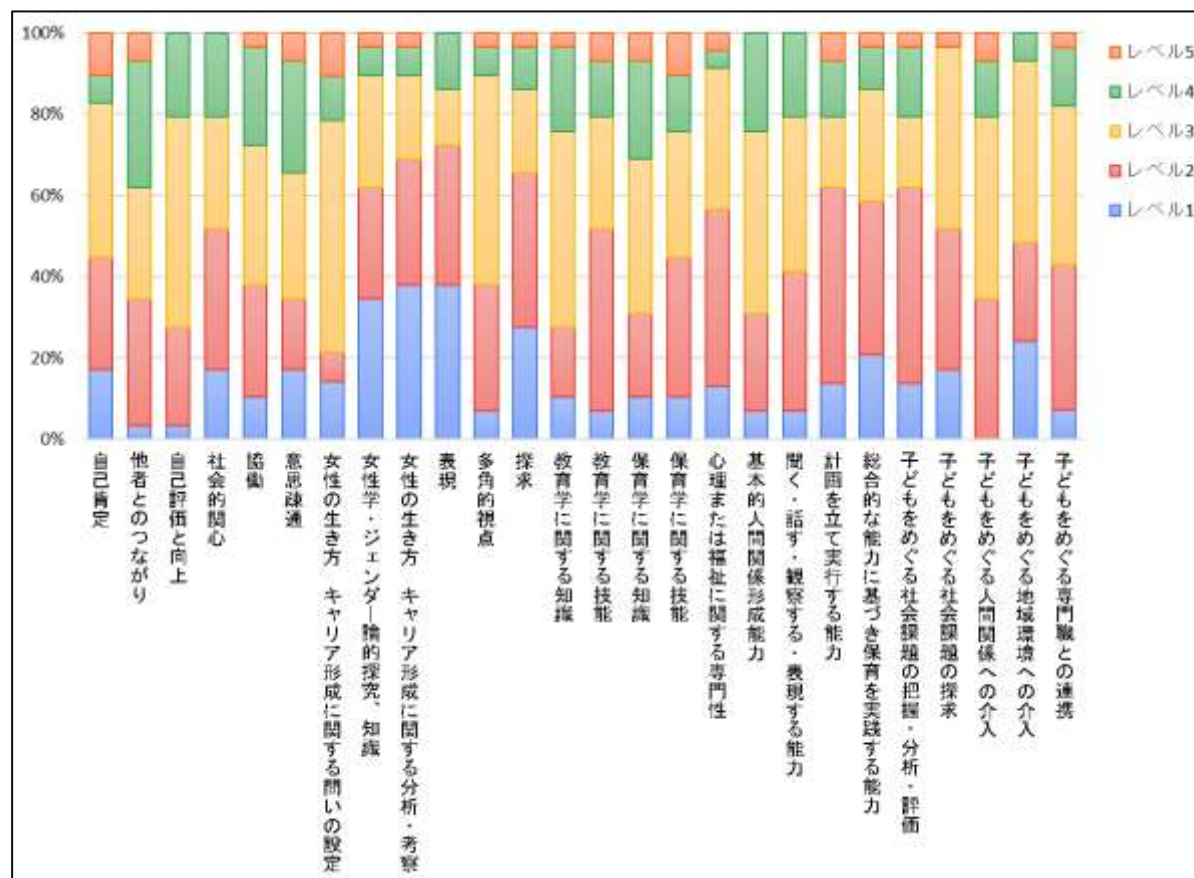


図 2 2025 年度 2 年生の結果 (n=29)

2025 年度 3 年生の回答者は 33 名、回答率は 40.2%であった。2025 年度 3 年生の自己評価を図 3 に示した。1・2 年生に比べてレベル 1 やレベル 2 の割合が低く、レベル 3 やレベル 4 の割合が高くなっていることが伺える。とりわけ「他者とのつながり」「協働」「教育学に関する知識」「子どもをめぐる社会課題の把握・分析・評価」「子どもをめぐる人間関係への介入」はレベル 4 以上の学生の割合が高かった。

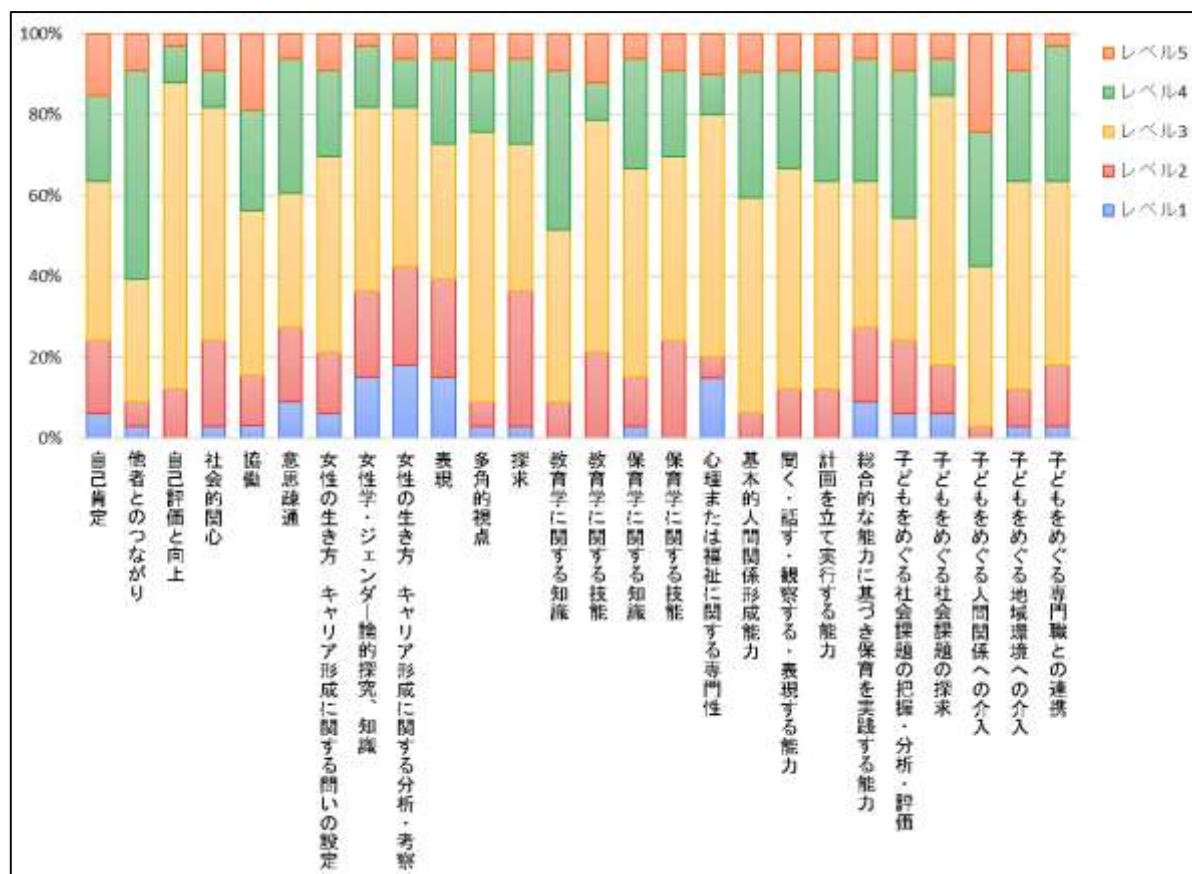


図 3 2025 年度 3 年生の結果 (n=33)

2025 年度 4 年生の回答者は 81 名、回答率は 79.4%であった。2025 年度 4 年生の自己評価を図 4 に示した。3 年生に比べてレベル 4 またはレベル 5 と回答している学生の割合が高く、すべての項目において半数以上の学生がレベル 4 またはレベル 5 と回答していた。とりわけ「他者とのつながり」「協働」「意思疎通」「子どもをめぐる社会課題の把握・分析・評価」はレベル 4 以上の学生の割合が高かった。

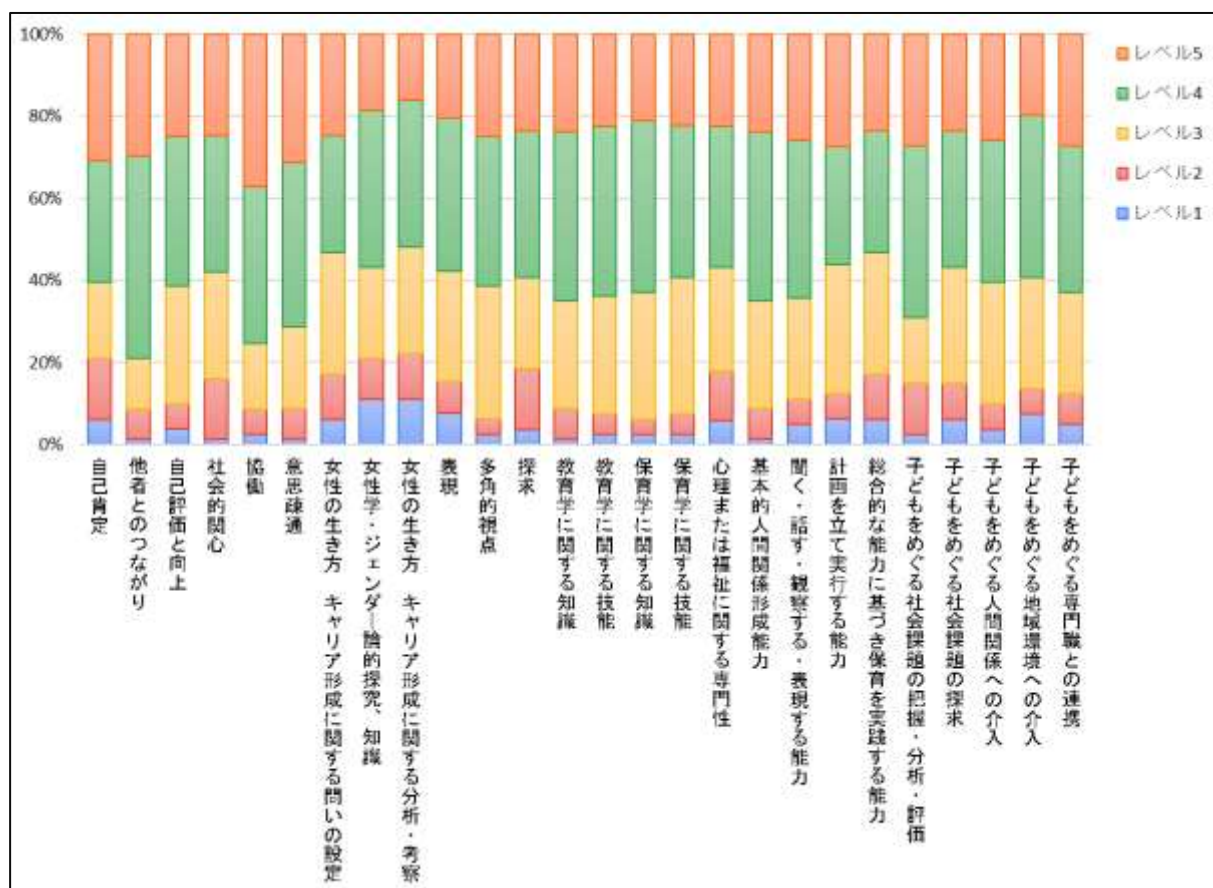


図4 2025年度4年生の結果 (n=81)

児童教育専攻のディプロマ・ポリシー(DP)1～7 に対する学生の自己評価は図のとおりである。今回(2025 年度末実施)のアンケート調査の回答数は、1 年生 24 件(回答率 60%)、2 年生 25 件(回答率 66%)、3 年生 20 件(回答率 49%)、4 年生 45 件(回答率 79%)であった。

○X1 年生について

総じてレベル 3 以上の回答が多い。各項目についてみると、DP1 の「他者とのつながり」、DP2 の「協働」や「意思疎通」、DP6 の「コミュニケーション力」の項目での自己評価が高いことから、将来の教員を目指す学生としての人間関係力の素養があることが分かる。一方、DP3 の「女性の生き方 キャリア形成に関する分析・考察」、DP6 の「教材研究力」、DP7 の「問題を分析し、解決する能力」の自己評価が低い傾向が明らかになった。これらについては学年が上がるほど専門的な学びが増えることから、減少すると考えられる。

○X2 年生について

14 項目でレベル 3 以上の回答があり、全体としての自己評価は高い傾向にある。特に DP1 の「他者とのつながり」、DP3 の「女性の生き方 キャリア形成」、DP4 の「多角的視点」、DP6 の「子どもをりかいする力」についての自己評価が高いことが分かる。一方、1 年生と同様に P3 の「女性の生き方 キャリア形成に関する分析・考察」、DP6 の「教材研究力」、DP7 の「問題を分析し、解決する能力」の自己評価が低い傾向が明らかになった。3 年次での各教科の教育法の科目や小学校等での教育実習を経て、自信をつけさせていきたい。

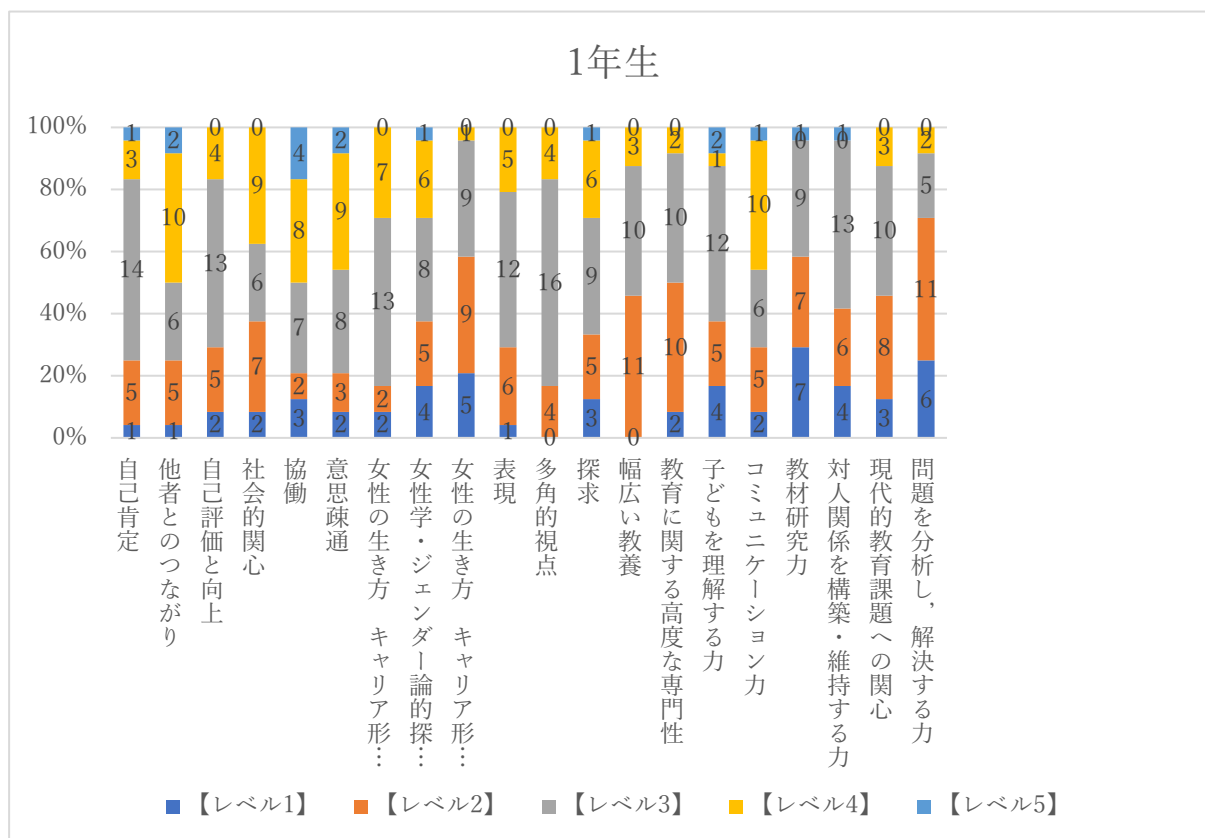
○X3 年生について

概ね、学生の自己評価は高く、各教科の教育法や教育実習等で経験を経て、自信をつけた結果であると考えられる。しいて言えば、DP「女性とキャリア」の項目でレベル 1 と 2 の回答が 40%程度であることから、特に卒業後に教育者となる割合が高い学生たちに女性としてのキャリア形成について考えさせる何らかの機会を増やしたいと考える。

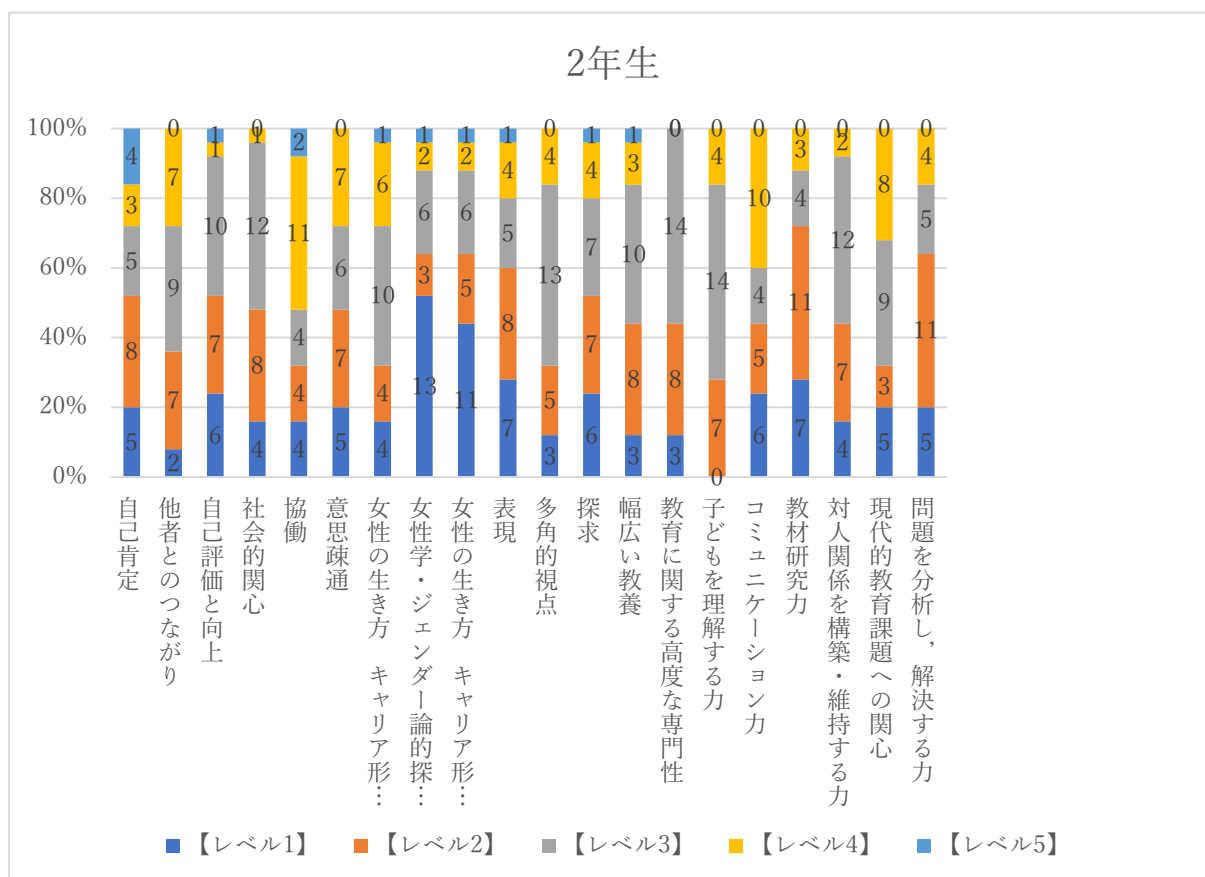
○X4 年生について

概ね、学生の自己評価は高く、各種の教育実習等や卒業研究を完成させる経験を経て、自信をつけた結果であると考えられる。特に DP7「課題解決能力」については、4 学年の中で最もレベル 3 以上としたが割合が高いことから、4 年間の学びを経て総合的な実践力、応用力を身につけたのだと考えられる。

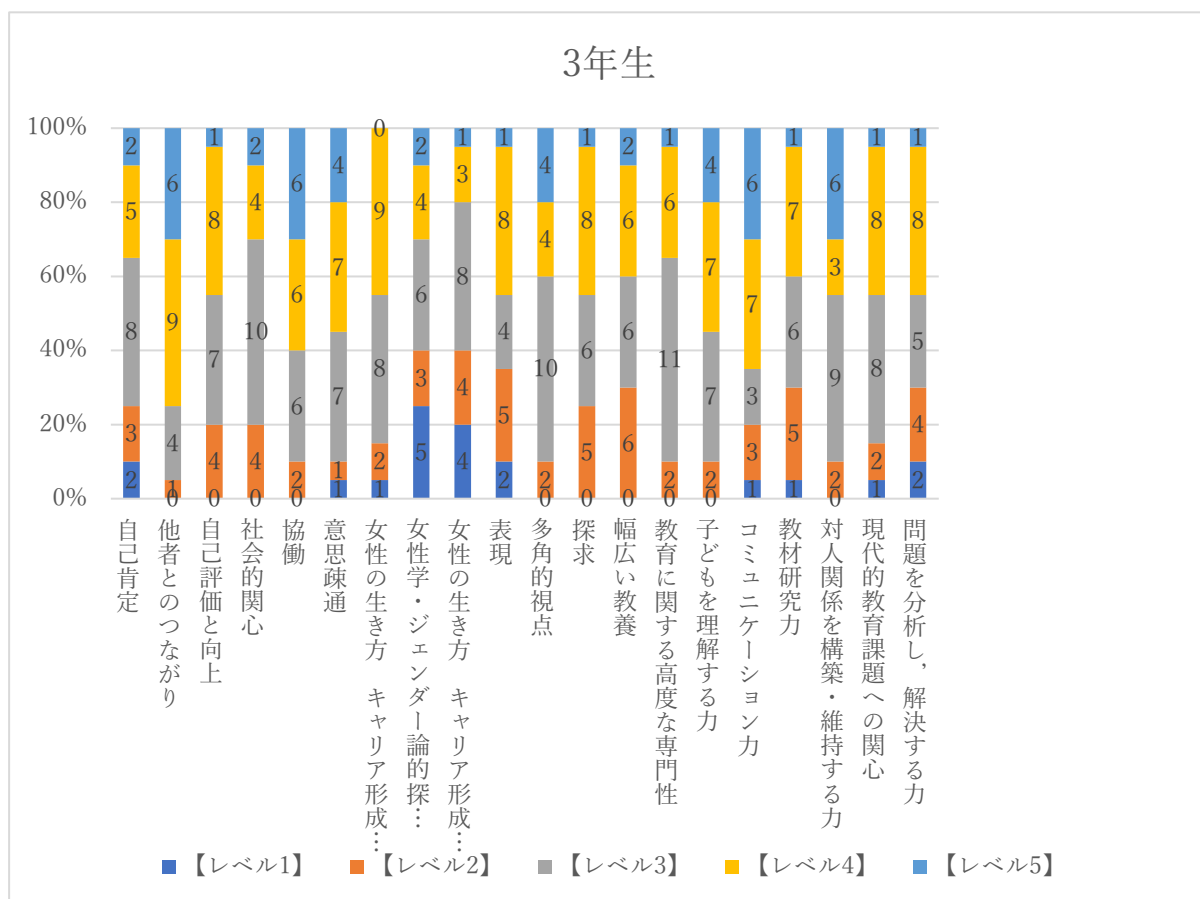
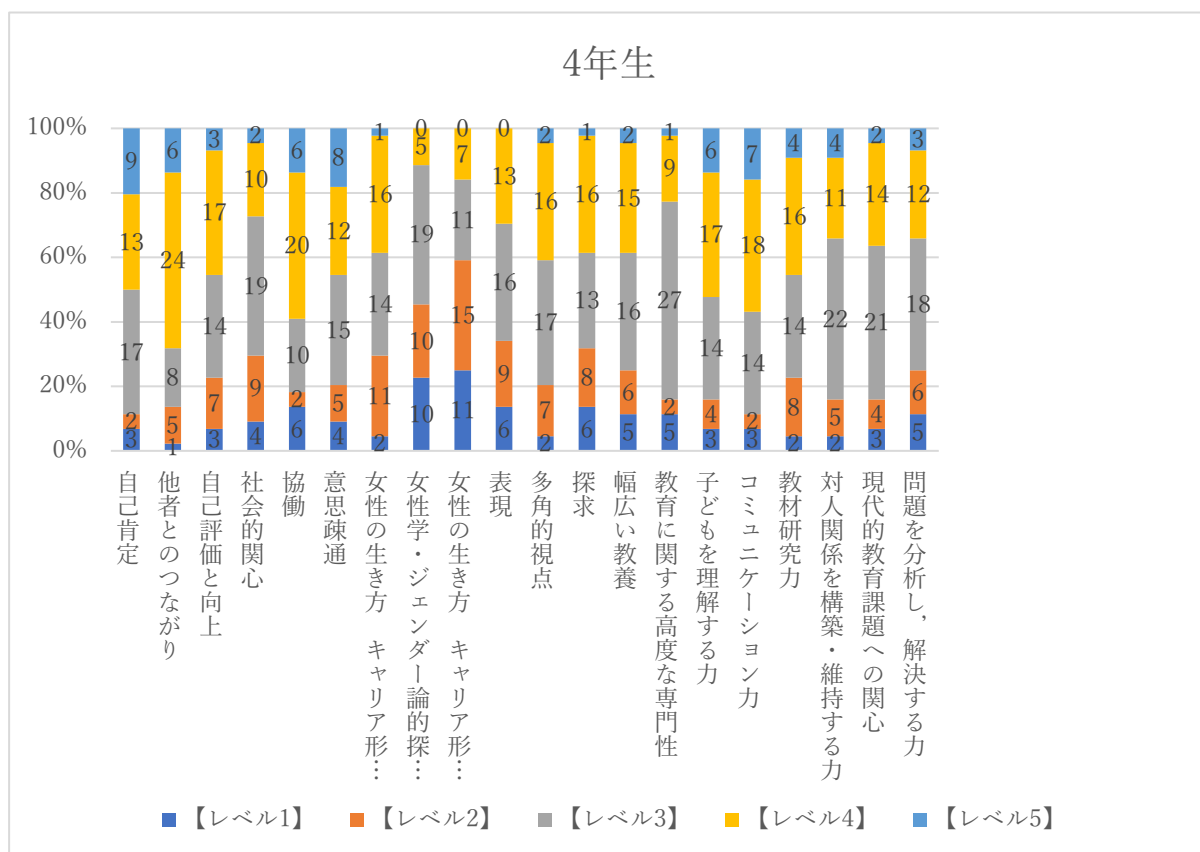
<資料：2025 年度末学修評価アンケート 集計結果>



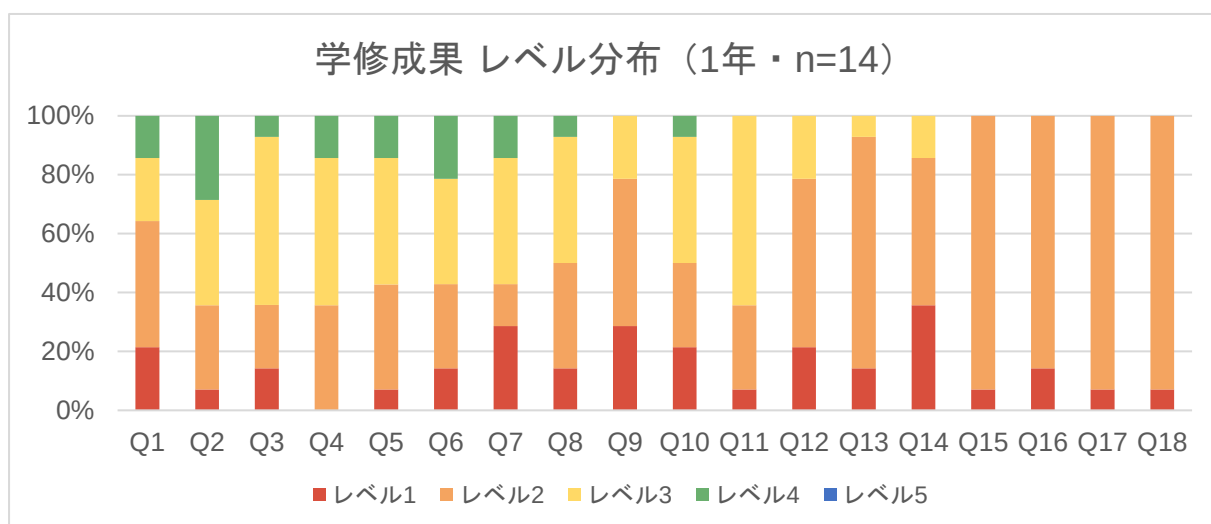
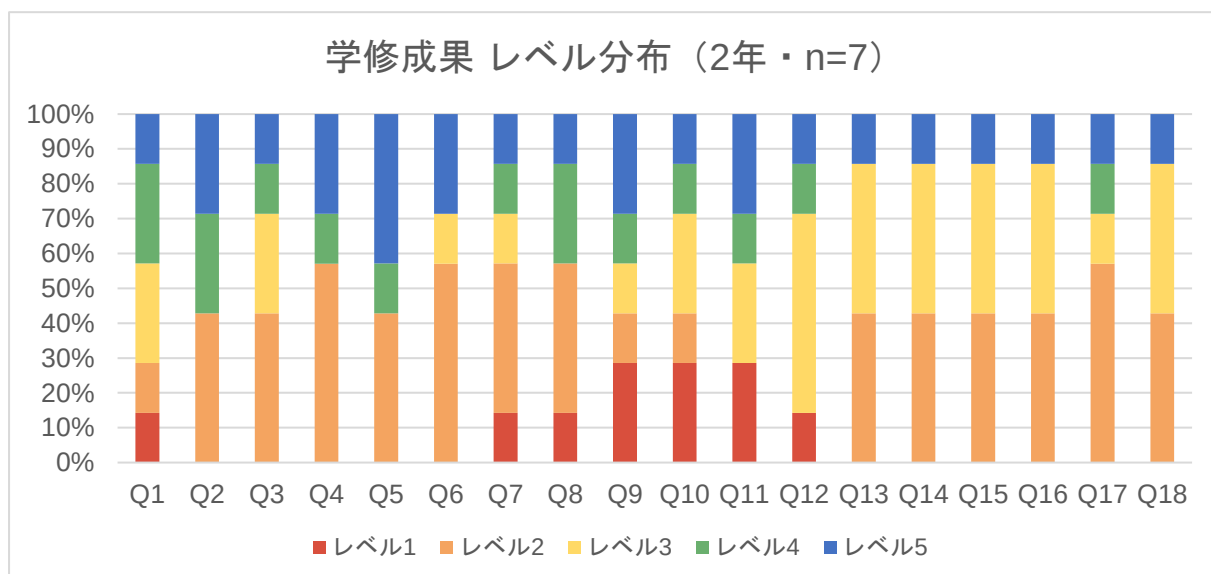
2025 年度 1 年生の集計結果(n=24)



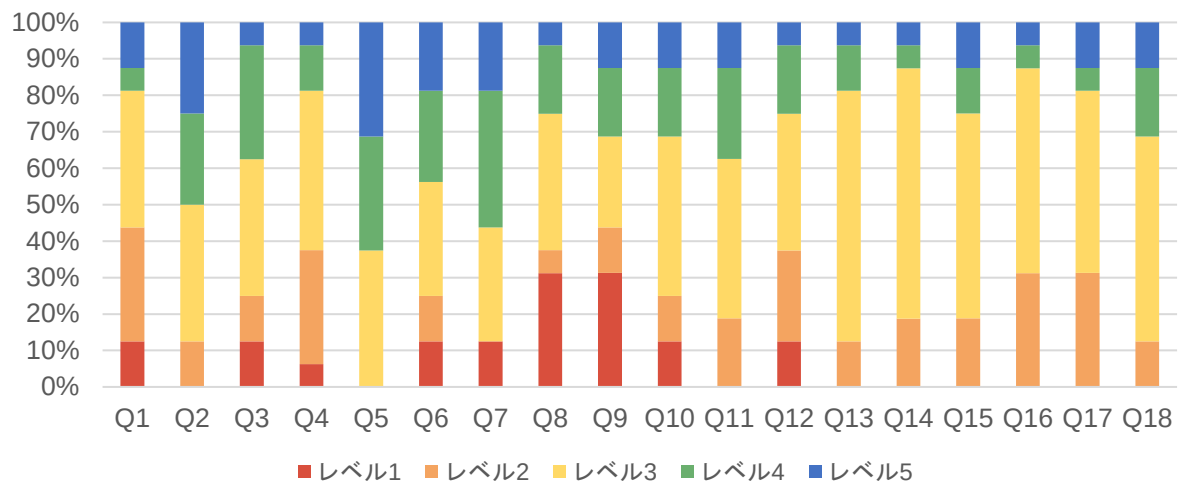
2025 年度 2 年生の集計結果(n=25)



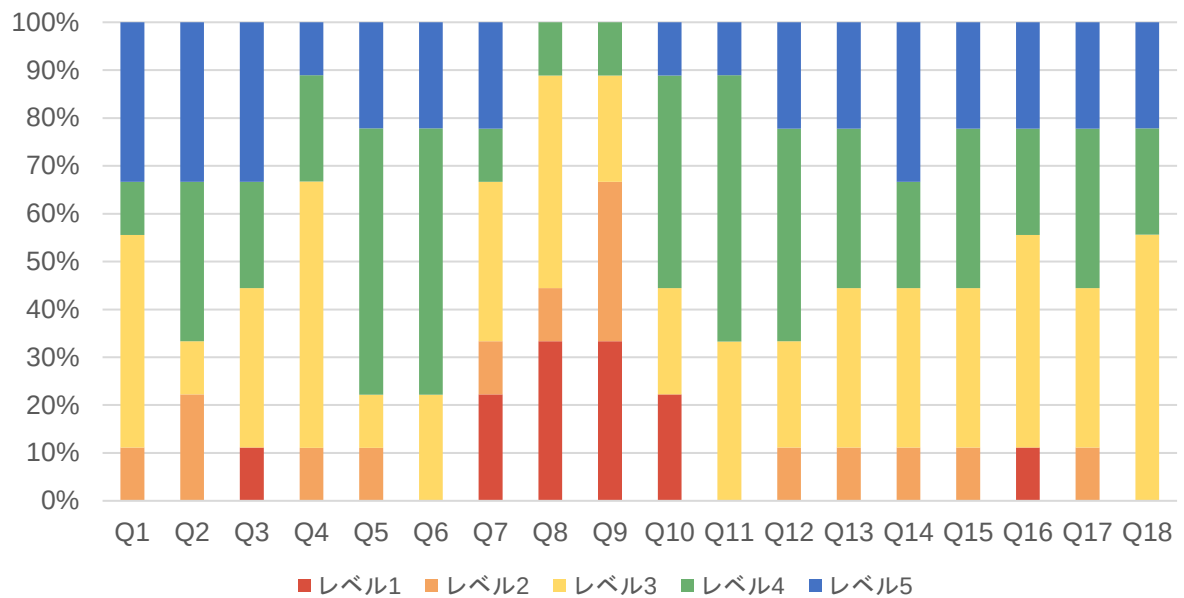
本アンケートの結果、学年が上がるにつれて全体的な自己評価スコアの上昇が確認され、教育の累積的な効果が示された。1 年生はすべての項目でスコアが低く、学習の出発点にあることが反映されている。2 年生では協働（Q5）や他者とのつながり（Q2）など対人・協働系の自己評価が伸び、1～2 年にかけて社会的スキルが成長したと考えられる。3 年生は専門性の高い実習・演習の効果とみられる専門的実践力（Q13～Q18）の伸長が見られ、全体的にバランスよく成長している。4 年生は意思疎通（Q6）・協働（Q5）・多角的視点（Q11）が全学年最高水準に達し、専門的実践力も高い自己評価を示した。一方、「女性学・ジェンダー知識（Q8）」と「女性の生き方・分析考察（Q9）」については 2 年次以降に停滞ないし低下傾向が見られ、全学年を通じた継続的な取り組みが課題である。なお、各学年のサンプルサイズに差があること（2 年 n=7、4 年 n=9）も今後の課題とする。



学修成果 レベル分布 (3年・n=16)



学修成果 レベル分布 (4年・n=9)



食品栄養学科（以下 F）の 2025 年度 学修評価アンケートを集計し、学年別に図 1～4 とした。また、前回 2023 年度実施結果を（ ）に示す。回答数は 1 年生 21（14）名、2 年生 24（12）名、3 年生 21（5）名、4 年生 30（29）名であった。回答率は 1 年生で 21.0（13.2）％、2 年生 22.4（11.0）％、3 年生 20.2（5.2）％、4 年生 30.0（29.0）％と 1～3 年生が 20％程度、4 年生が 30％で前回と比較して 1～3 年生は 10％程度高く、4 年生はほぼ同程度であった。

前回より若干上昇したものの全体として 23.0％と低く、F 科としての傾向と考えることはやはり難しいが、今回もその前提において各項目を考察することとした。してで極めて低く、今後は回答率の上昇を促すことが必要であると考えられる。したがって、F 全体の現状と考えることは難しいが、その前提において各項目を考察することとした。

（1）F1・2 年生

F1・2 年生の DP 項目別自己評価結果を、それぞれ図 1・図 2 に示す。レベル 3 以上の学生が 40％未満（レベル 3 未満の学生が 60％以上）の項目は、1 年生で、DP3（女性のキャリア）の「女性学・ジェンダー論的探究・知識」・「キャリア形成の分析・考察」、DP5（専門知識と実践力）の「必要な知識」・「実践する能力」、DP 6（主体的発見力と解決力）の「社会的課題解決に向かって行動」、DP 8（社会人として学び続ける姿勢）の「地域社会への貢献」・「自己研鑽する姿勢」・「基盤となる専門知識」であり、DP 8（社会人として学び続ける姿勢）、および DP5（専門知識と実践力）について、すべての項目で低かったが、この傾向は 2023 年度と同様の結果であった。前回低かった自己受容について「自己肯定」「他者とのつながり」とともにレベル 3 以上の学生が 66.7％だった。2 年生では DP3「キャリア形成の分析・考察」・「表現」、DP5「必要な知識」・「実践する能力」、DP 8「地域社会への貢献」・「自己研鑽する姿勢」・「基盤となる専門知識」であった。2 年生でレベル 3 以上の学生が 40％以上となった項目は、DP3「女性学・ジェンダー論的探究・知識」「キャリア形成の分析・考察」、DP 6「社会的課題解決に向かって行動」であり、2 年生で女性のキャリアについて意識の低い学生が減少したと考えられた。

1, 2 年生の特徴と言えることは、DP 5 と DP 8 が低い学生が多いことである。DP 5（専門知識と実践力）においてレベル 3 以上の学生について、「必要な知識」は 1 年生 28.6％、2 年生 33.3％、「実践する能力」は 1 年生 19.0％、2 年生 25％であり、1 学年より 2 学年で高い傾向が示唆されるものの、専門知識と実践力の低い学生が多かった。DP 8（社会人として学び続ける姿勢）においてレベル 3 以上の学生について、「地域社会への貢献」は 1 年生 38.1％、2 年生 33.3％、「自己研鑽する姿勢」は 1 年生 33.3％、2 年生 20.8％、「基盤となる専門知識」は 1 年生 28.6％、2 年生 16.6％であり、特に基盤となる専門知識が低い学生が多い傾向が示唆された。

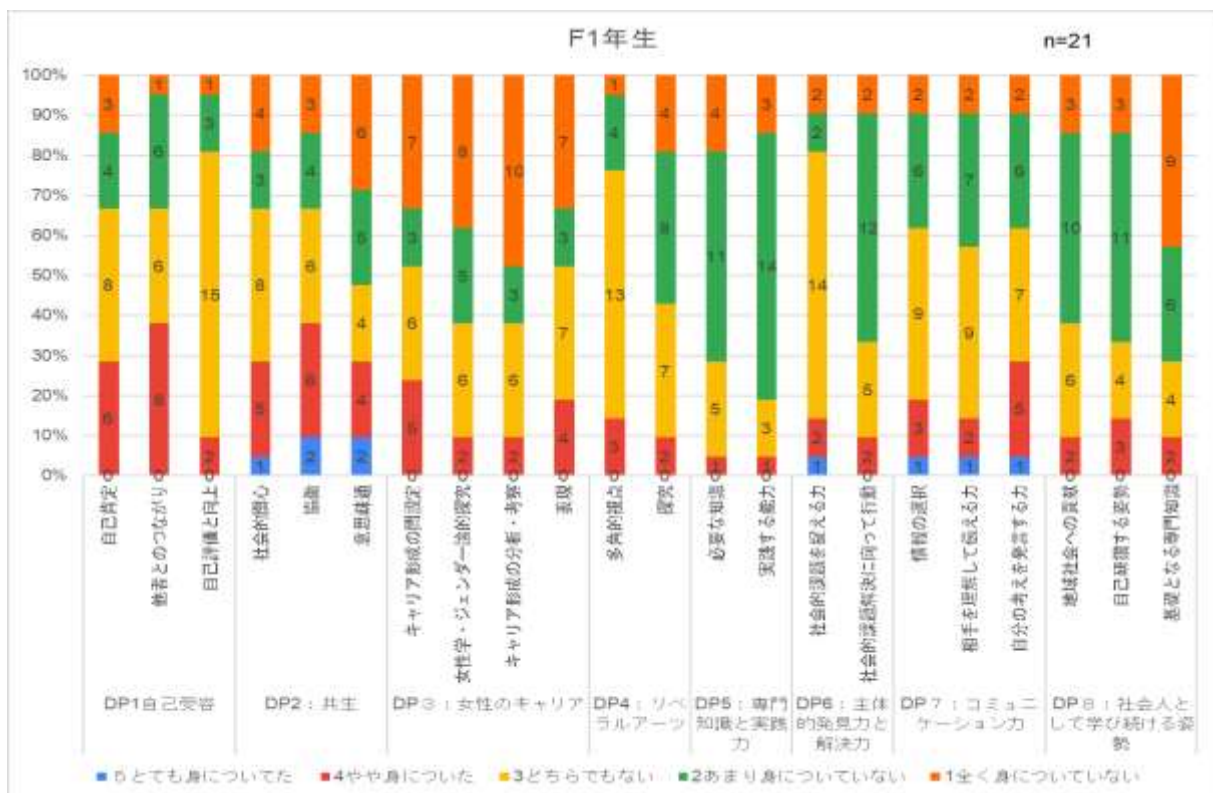


図 1. 食品栄養学科 DP 項目別ポイント (F1) (n=21)

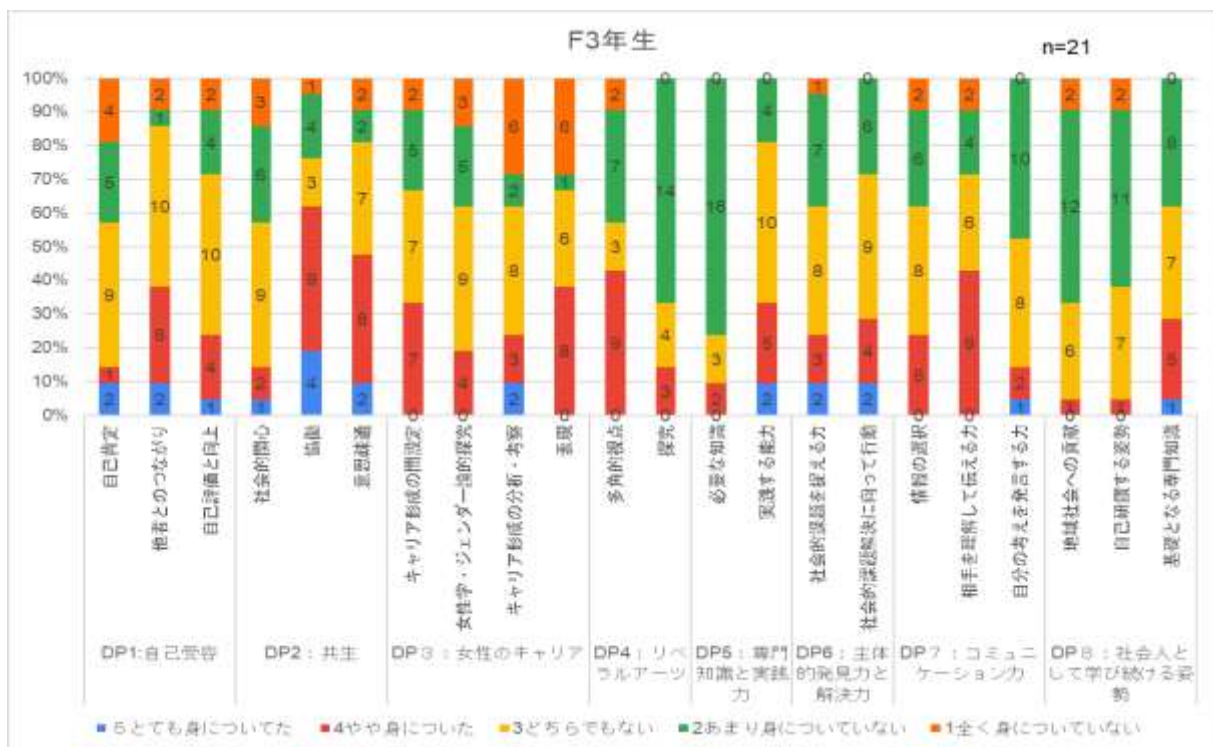


図 2. 食品栄養学科 DP 項目別ポイント (F2) (n=24)

（２）３・４年生

F3・４年生の DP 項目別自己評価結果を、それぞれ図 3・図 4 に示す。レベル 3 以上の学生が 40%未満（レベル 3 未満の学生が 60%以上）の項目は、３年生で、DP 4（リベラルアーツ）の「探究」（33.3%）、DP5（専門知識と実践力）の「必要な知識」（23.8%）、DP 8（社会人として学び続ける姿勢）の「地域社会への貢献」（33.3%）・「自己研鑽する姿勢」（38.0%）であり、４年生はレベル 3 以上の学生が 40%未満の項目がなかった。

1, 2 年生と比較して全体的に自己評価が高くなる傾向が示唆された。1, 2 年生で低かった DP5（専門知識と実践力）および DP 8（社会人として学び続ける姿勢）について、レベル 3 以上の学生の割合をみると、DP 5「必要な知識」は３年生 23.8%（再掲）であるが、４年生 66.6%、「実践する能力」は３年生 81.0%、４年生 76.7%と高い。DP 8「地域社会への貢献」は３年生 33.3%（再掲）であるが、４年生 80.0%、「自己研鑽する姿勢」は３年生 38.1%（再掲）であるが４年生 76.7%、「基礎となる専門知識」は３年生 61.9%、４年生 86.7%と高くなった。４年生では、すべての項目でレベル 3 以上の学生が 55%以上であった。

以上のことから本学の学修により自己評価が上昇する傾向が示唆されたが、回答率が低いことから現状をより明確に把握するために今後の課題として回収率を高めるための方策があげられる。

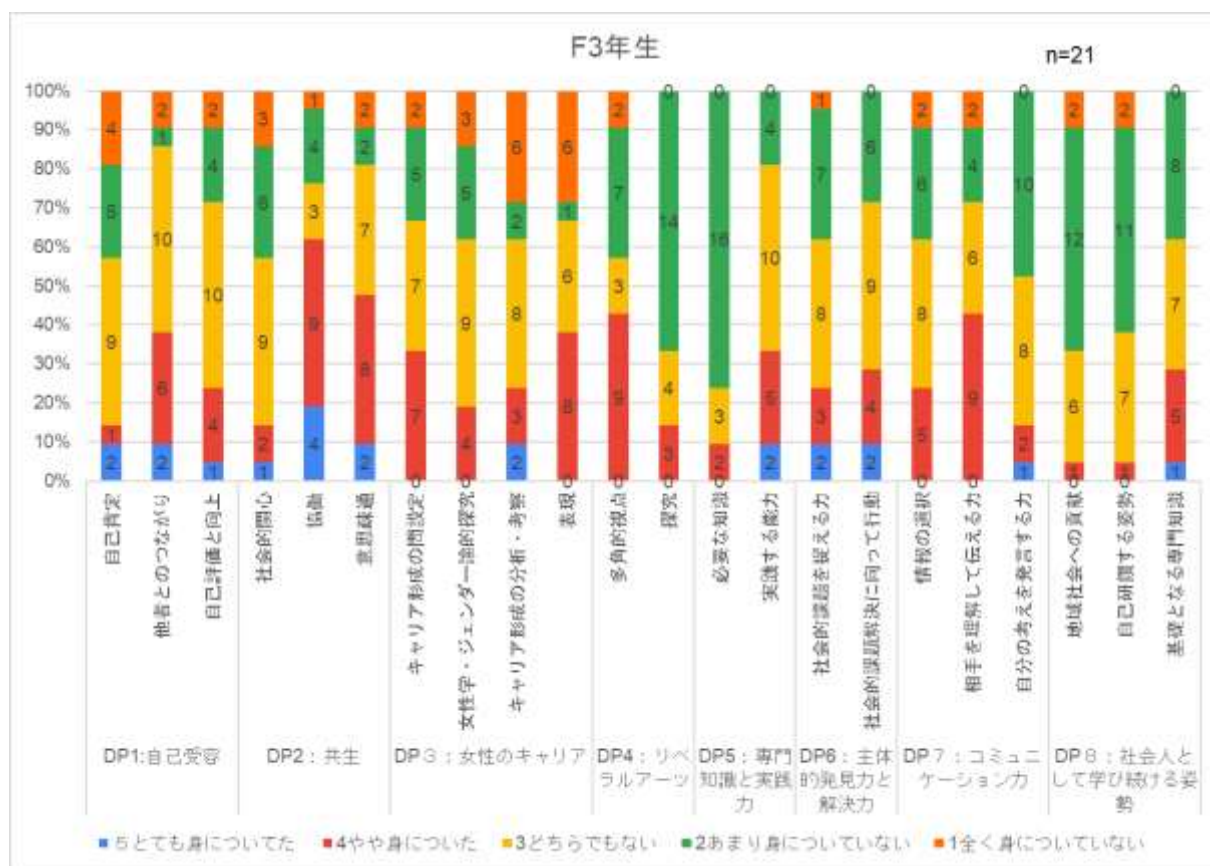


図 3. 食品栄養学科 項目別ポイント（F3）（n=21）

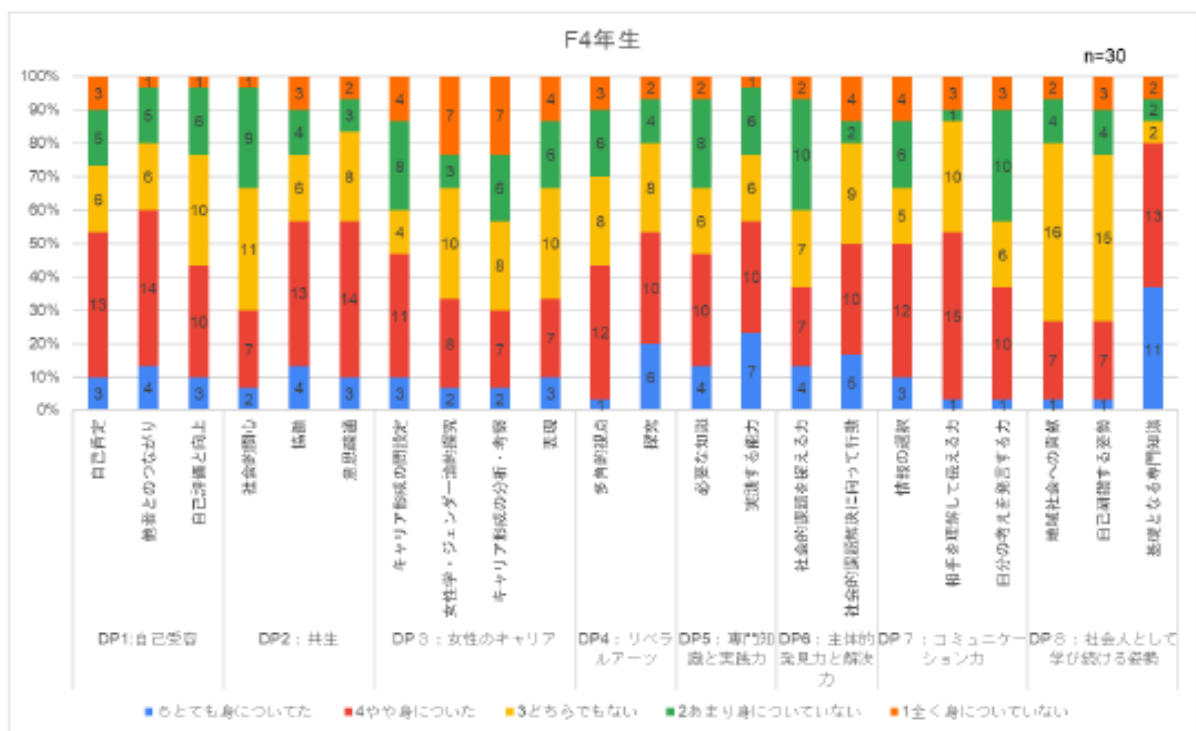


図 4. 食品栄養学科 項目別ポイント (F4) (n=30)

生活文化デザイン学科 2025 年度学修評価アンケート結果と考察

・学科固有 DP について

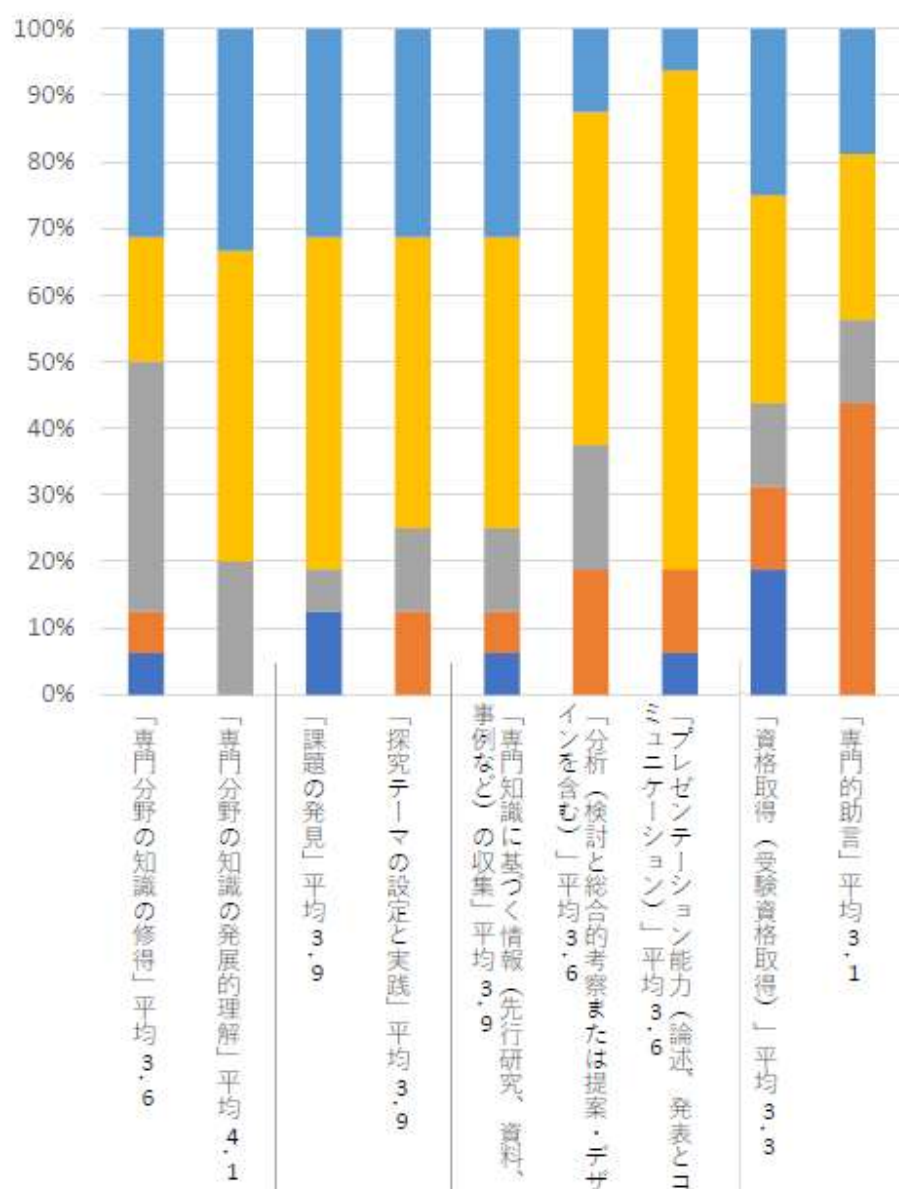
生活文化デザイン学科の固有 DP に関する学生の自己評価を問うたアンケートの結果を図表 1（4 年生）、図表 2（3 年生）、図表 3（2 年生）、図表 1（1 年生）に示す。回答率〔回答人数〕は全学年で 29%〔56 名〕、4 年生 29%〔16 名〕、3 年生 21%〔15 名〕、2 年生 24%〔10 名〕、1 年生 58%〔16 名〕であった。

DP5 から DP8 の全ての質問項目で。学年が上がるに連れ、順調に自己評価レベルが高まっている様子が確認できた。4 年生（卒業学年）において、DP5「専門分野の知識の発展的理解」がレベル平均値 4.1、DP6「課題の発見」、DP6「探究テーマの設定と実践」、DP7「専門知識に基づく情報（先行研究、資料、事例など）の収集」がいずれもレベル平均値 3.9 で、レベル 4 以上の学生が約 8 割であった。また DP7「プレゼンテーション能力（論述、発表とコミュニケーション）」のレベル平均値は 3.6 であったが 8 割以上の学生がレベル 4 以上であった。DP5「専門分野の知識の修得」は平均値 3.6、レベル 4 以上は 5 割、DP7「分析（検討と総合的考察または提案・デザインを含む）」は平均値 3.6、レベル 4 以上は 6 割であった。なお職業レベルでの専門性の修得にかかわる DP8 については、他の項目より低く、「資格取得（受験資格取得）」は平均値 3.3、レベル 4 以上 6 割弱、「専門的助言」は平均値 3.1、レベル 4 以上 4 割強であった。この結果から、生活文化デザイン学科卒業生は学科固有の DP を概ね達成して自ら成長できる力を獲得し、また専門的な提案能力を一定程度身につけて卒業したことが確認できる。

・MGU スタANDARD DP について

生活文化デザイン学科学生の MGU スタANDARD に関わる DP の自己評価を問うたアンケートの結果を図表 5（4 年生）、図表 6（3 年生）、図表 7（2 年生）、図表 8（1 年生）に示す。回答率〔回答人数〕は全学年で 29%〔56 名〕、4 年生 29%〔16 名〕、3 年生 21%〔15 名〕、2 年生 24%〔10 名〕、1 年生 58%〔16 名〕であった。

卒業学年についてみると、レベル 4 以上の回答をした割合は「自己肯定」「他者とのつながり」では 7 割以上、「多角的視点」が 6 割強で比較的高く、「自己評価と向上」「協働」「女性学・ジェンダー論的探究、知識」「探究」は 5 割程度、「社会的関心」「女性の生き方 キャリア形成」に関する 2 項目はいずれも 4 割強であった。レベル平均値は最高が「多角的視点」の 4、これに対し「社会的関心」「表現」は 3.3 でやや低かった。全体に学科固有の DP よりやや低い傾向にあり、項目による差があるが、概ね達成されているとみられる。



DP5:専門知識修得

DP6:問題発見・解決

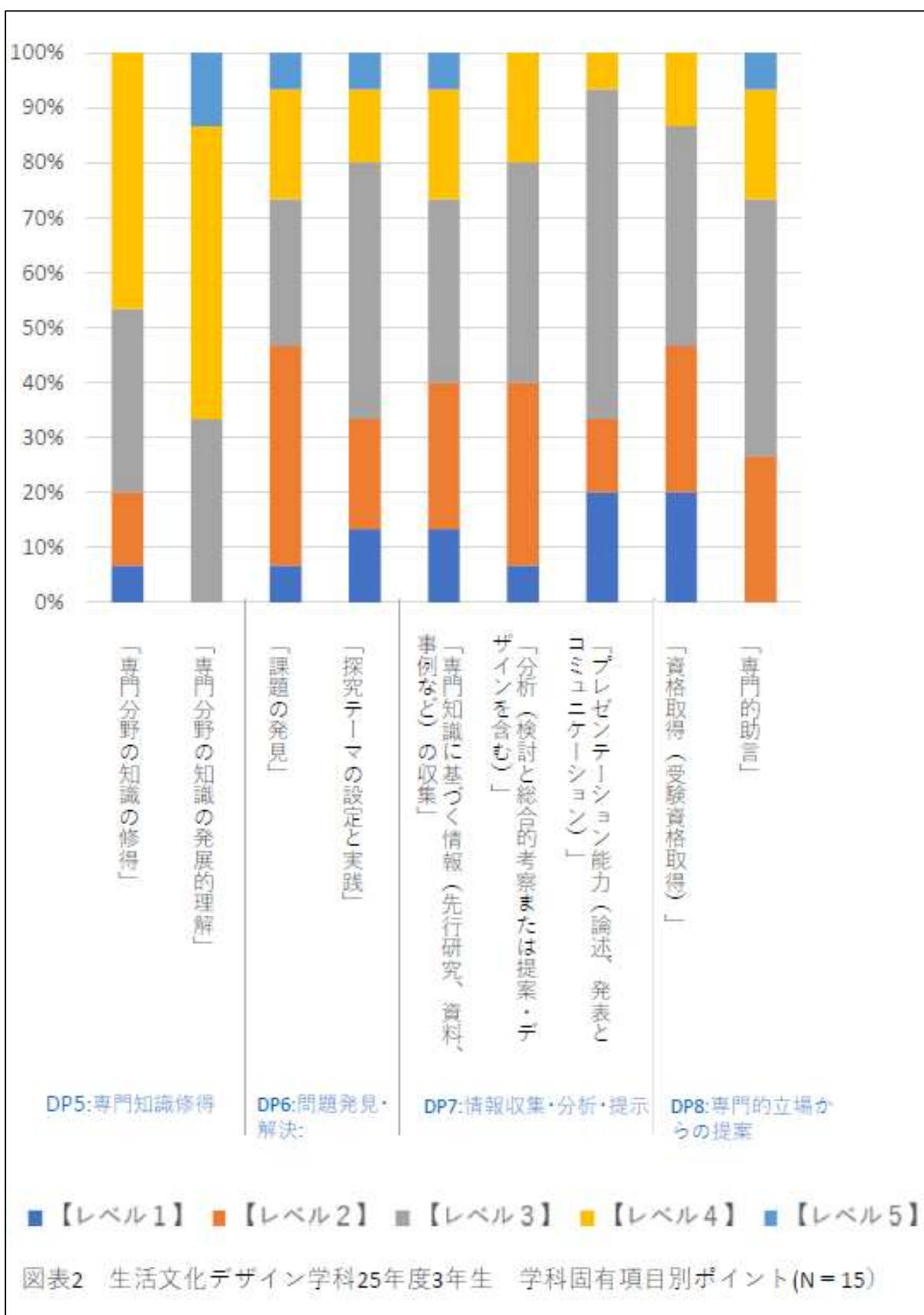
DP7:情報収集・分析・提示

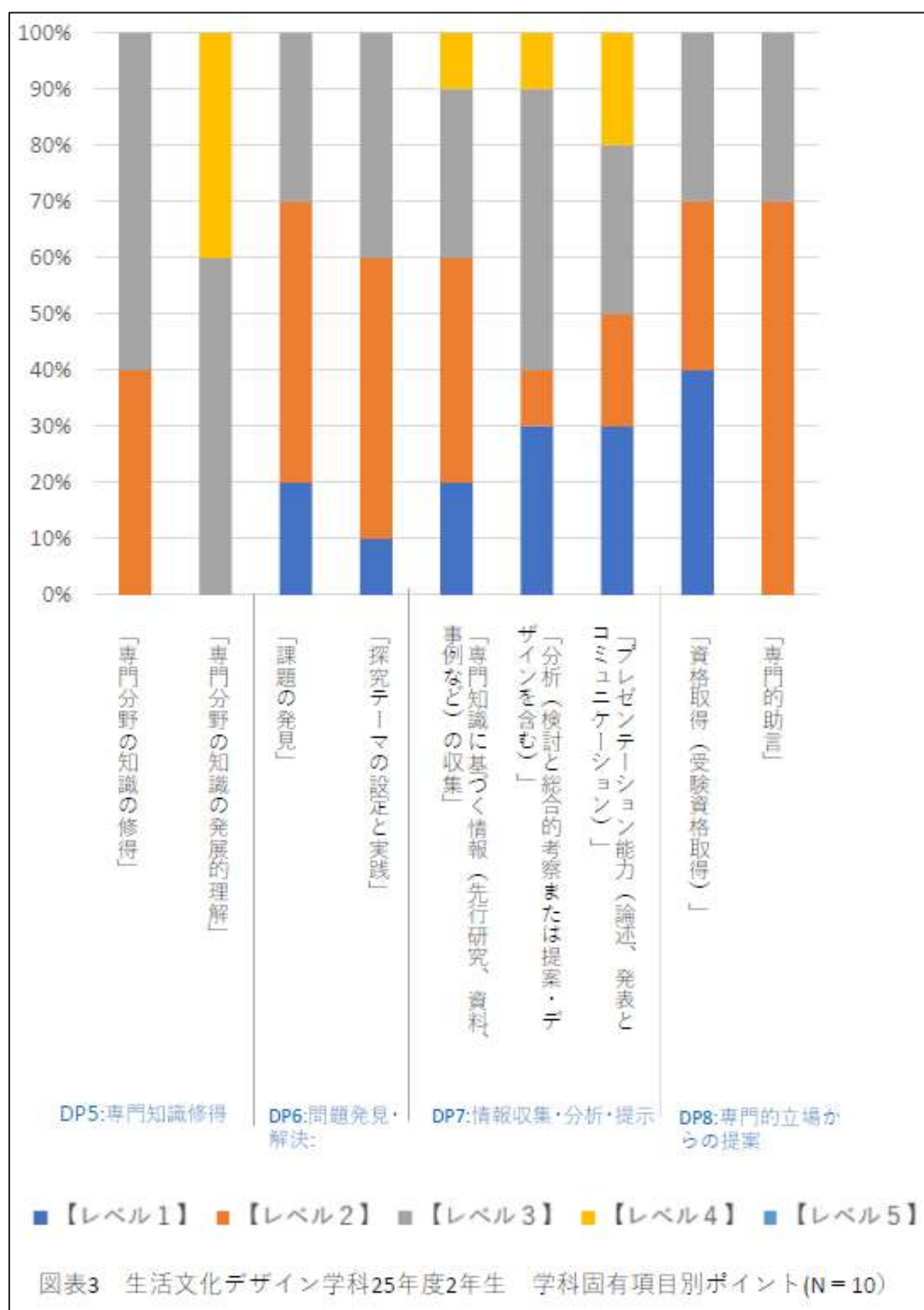
DP8:専門的立場からの提案

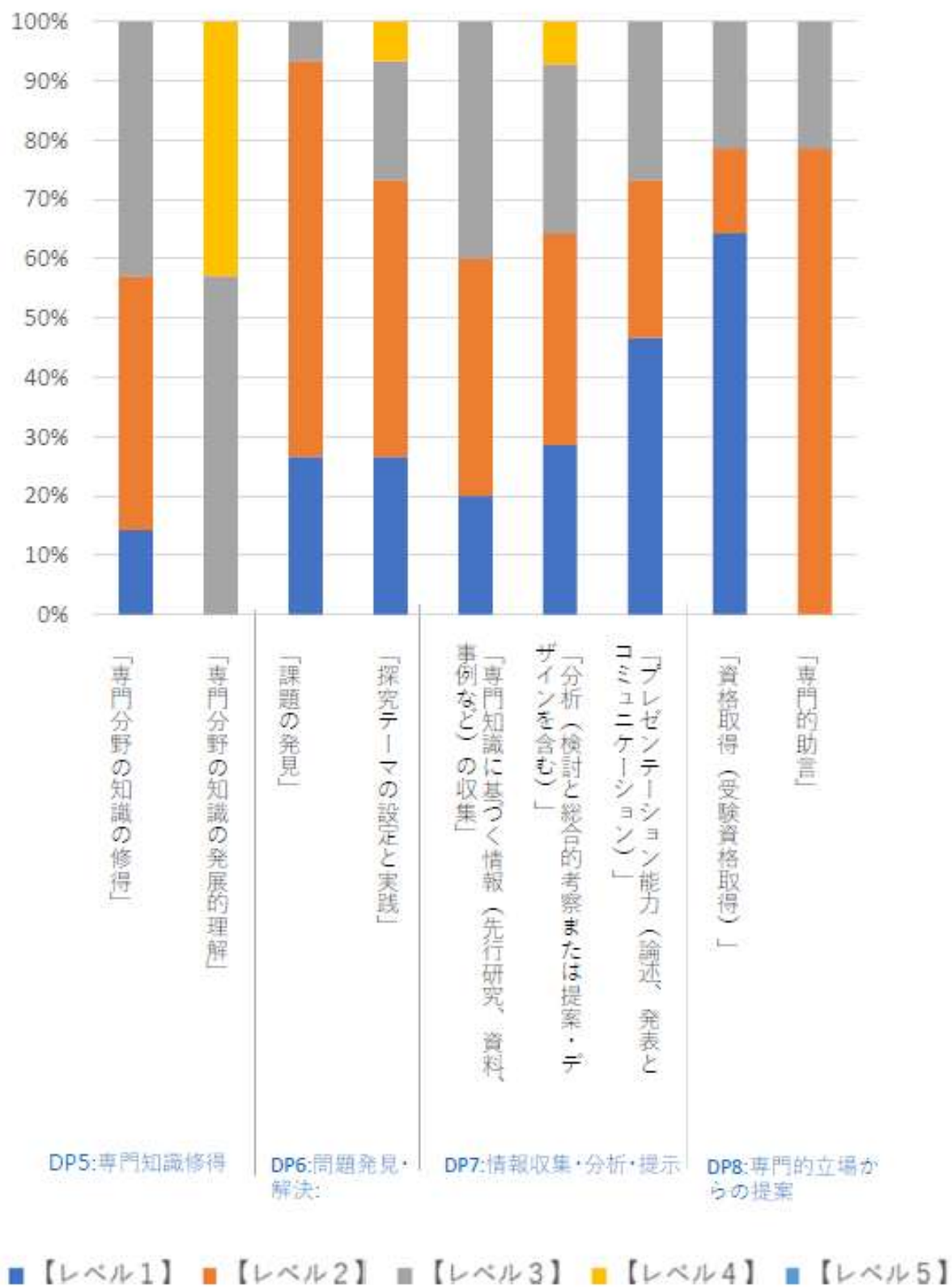
■【レベル1】 ■【レベル2】 ■【レベル3】 ■【レベル4】 ■【レベル5】

項目	「専門分野の知識の修得」	「専門分野の知識の発展的理解」	「課題の発見」	「探究テーマの設定と実践」	「専門知識に基づく情報（先行研究、事例など）の収集」	「分析（検討と総合的考察または提案・デザインを含む）」	「プレゼンテーション能力（論述、発表とコミュニケーション）」	「資格取得（受験資格取得）」	「専門的助言」
平均レベル	3.6	4.1	3.9	3.9	3.9	3.6	3.6	3.3	3.1

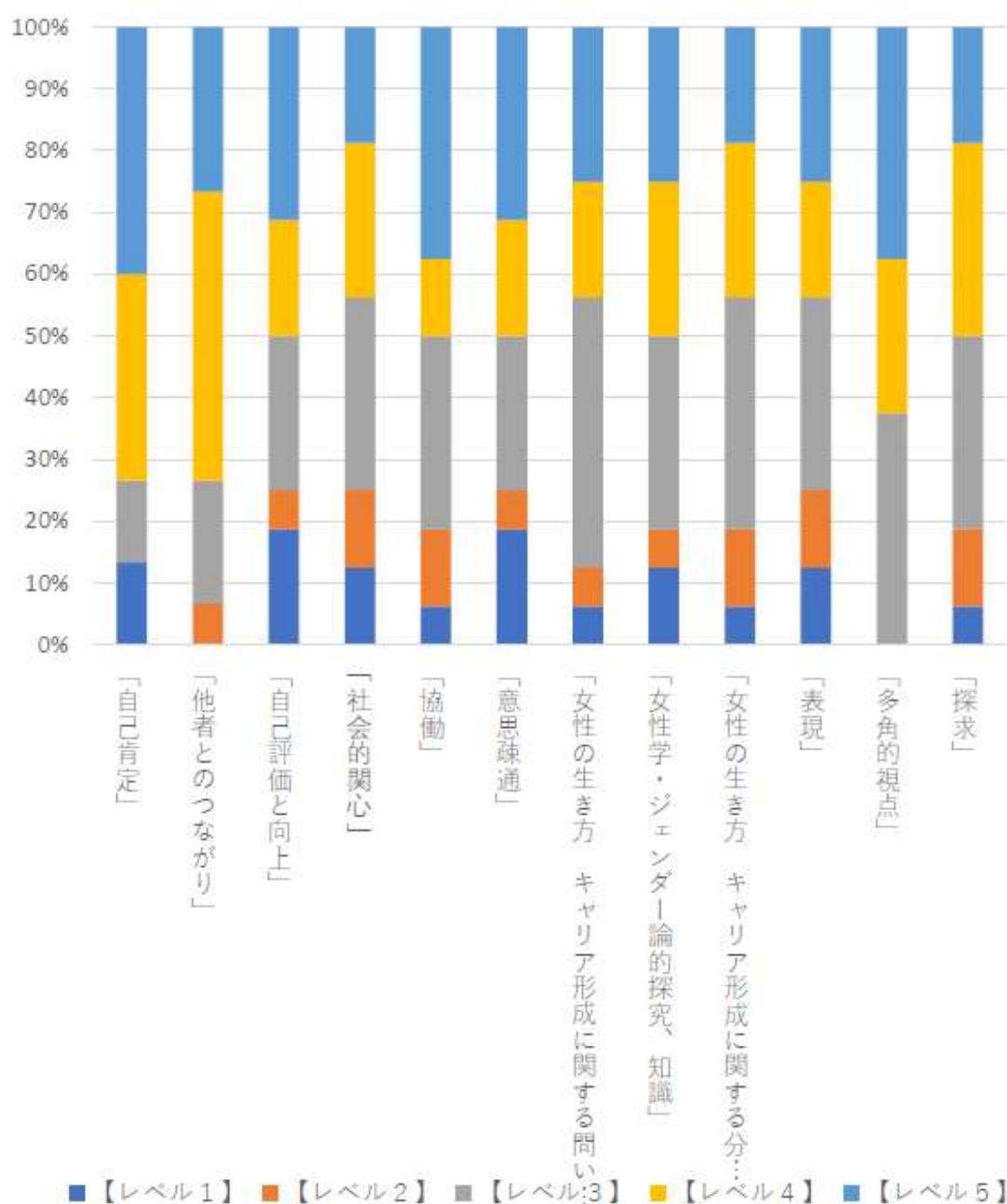
図表1 生活文化デザイン学科25年度4年生 学科固有項目別ポイント(N=16)





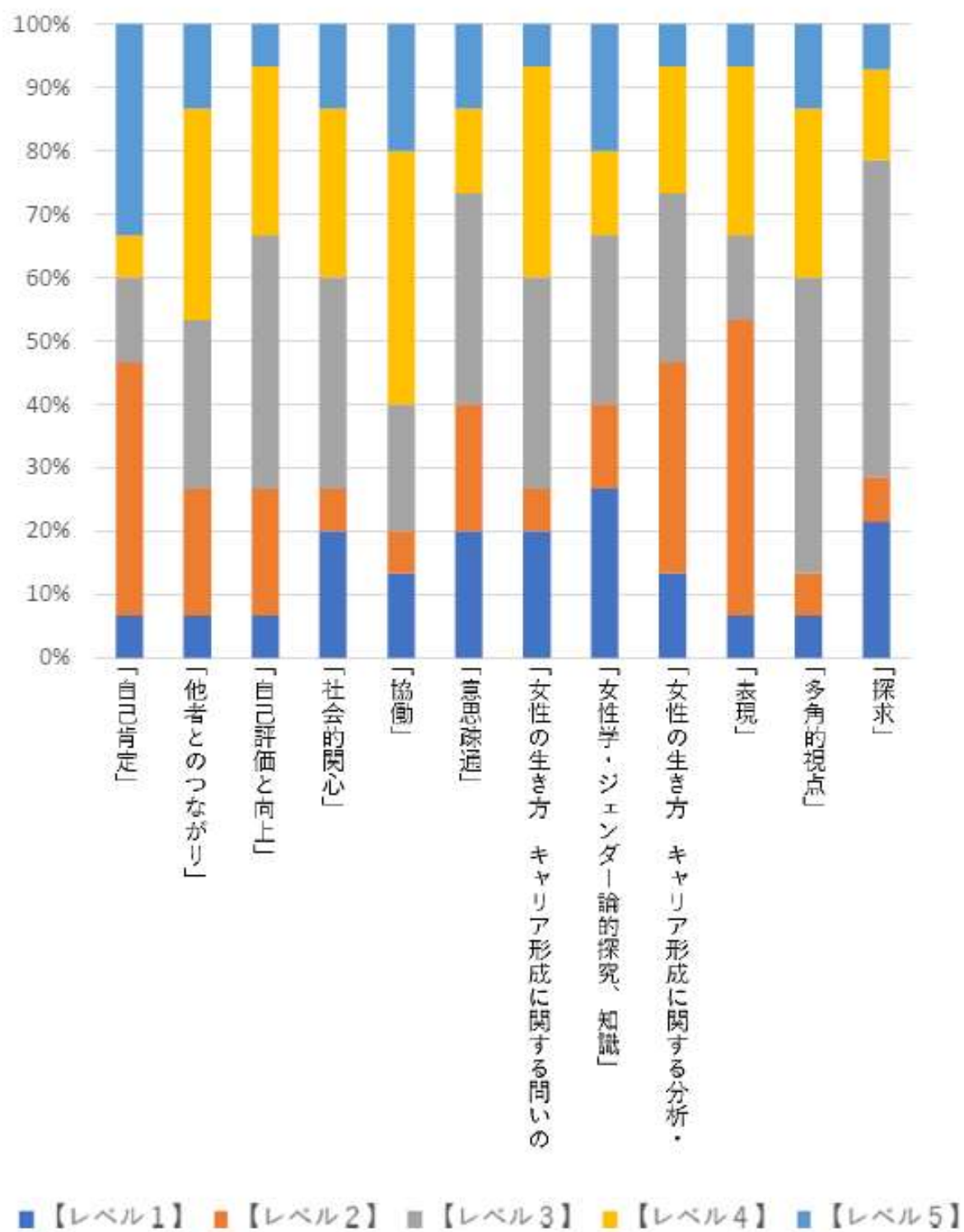


図表4 生活文化デザイン学科25年度1年生 学科固有項目別ポイント(N=15)

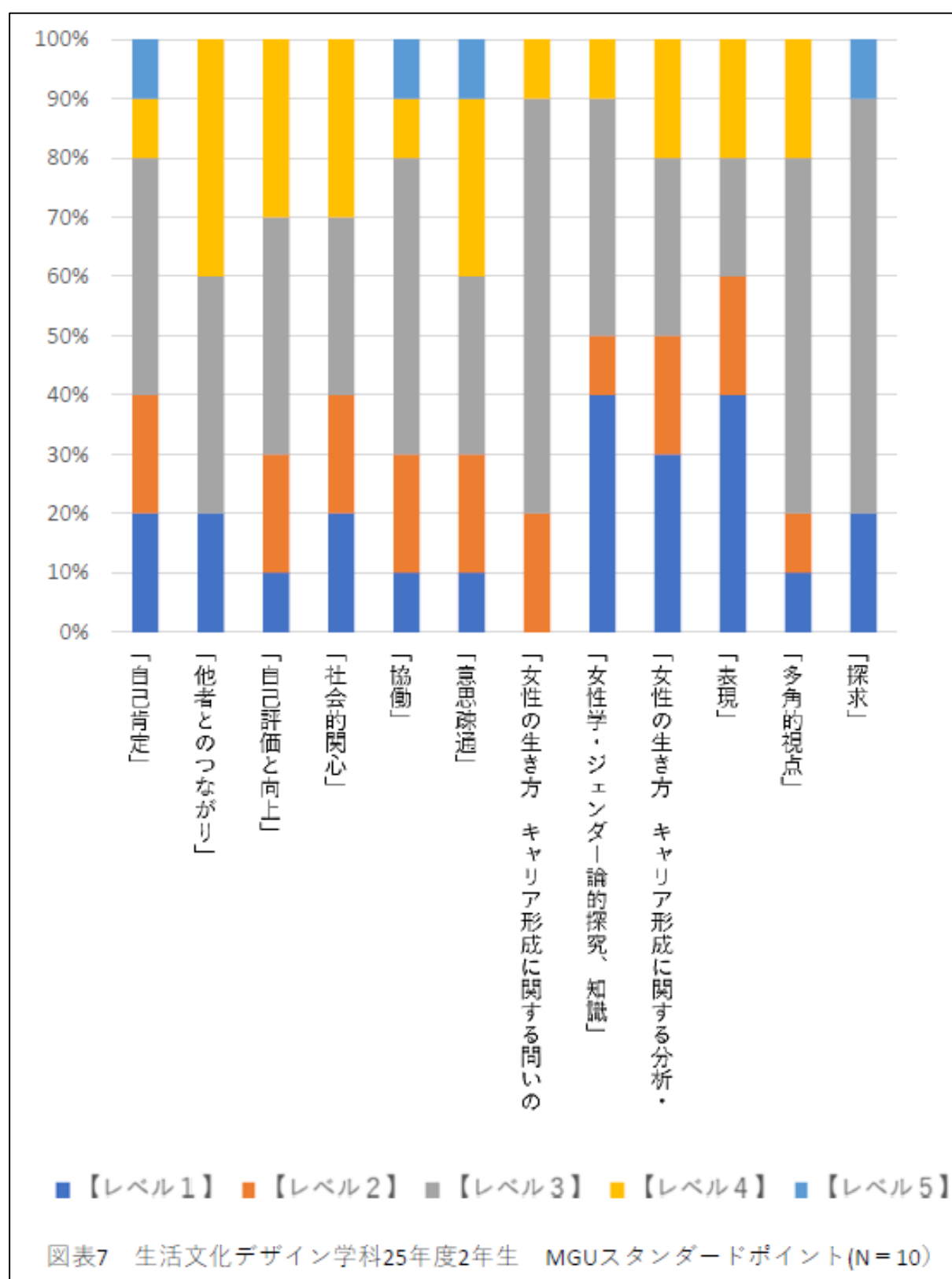


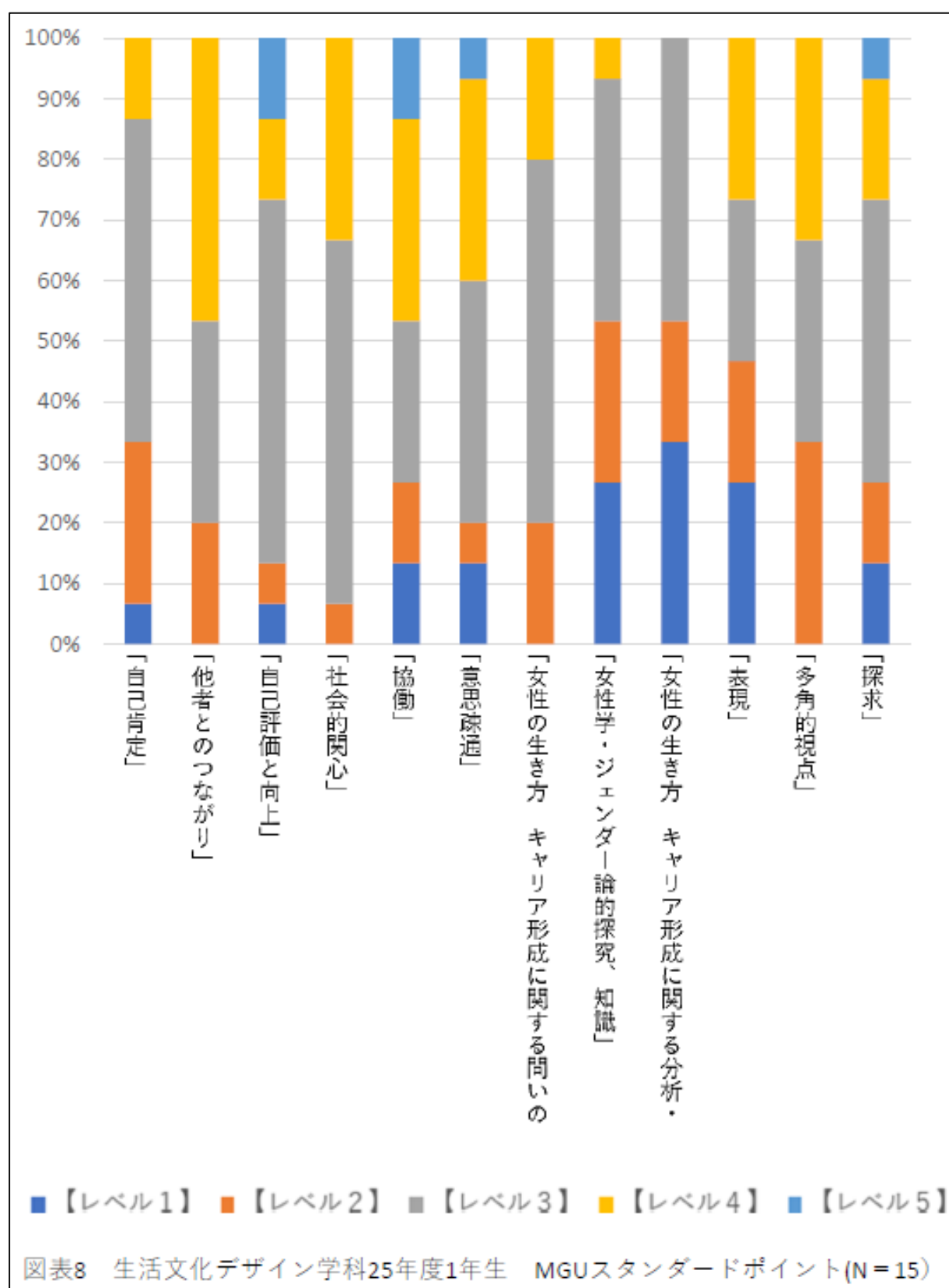
項目	「自己肯定」	「他者とのつながり」	「自己評価と向上」	「社会的関心」	「協働」	「意思疎通」	「女性の生き方 キャリア形成に関する問いの設定」	「女性学・ジェンダー論的探究、知識」	「女性の生き方 キャリア形成に関する分析・考察」	「表現」	「多角的視点」	「探求」
平均レベル	3.9	3.9	3.4	3.3	3.6	3.4	3.5	3.4	3.4	3.3	4	3.4

図表5 生活文化デザイン学科25年度4年生 MGUスタンダードポイント(N=16)



図表6 生活文化デザイン学科25年度3年生 MGUスタンダードポイント(N=15)





I 全体の回答状況

回答数は1年生が88人中32人、2年生が81人中24人、3年生が110人中21人、4年生が98人中47人に留まり、必ずしも学科全体の状況を示すものではない。

II 一般教育 DP (DP1～DP4)

DP1 自己受容自らの価値に肯定的に向き合い、他者との関係の中でその理解を深め、高めることができる。

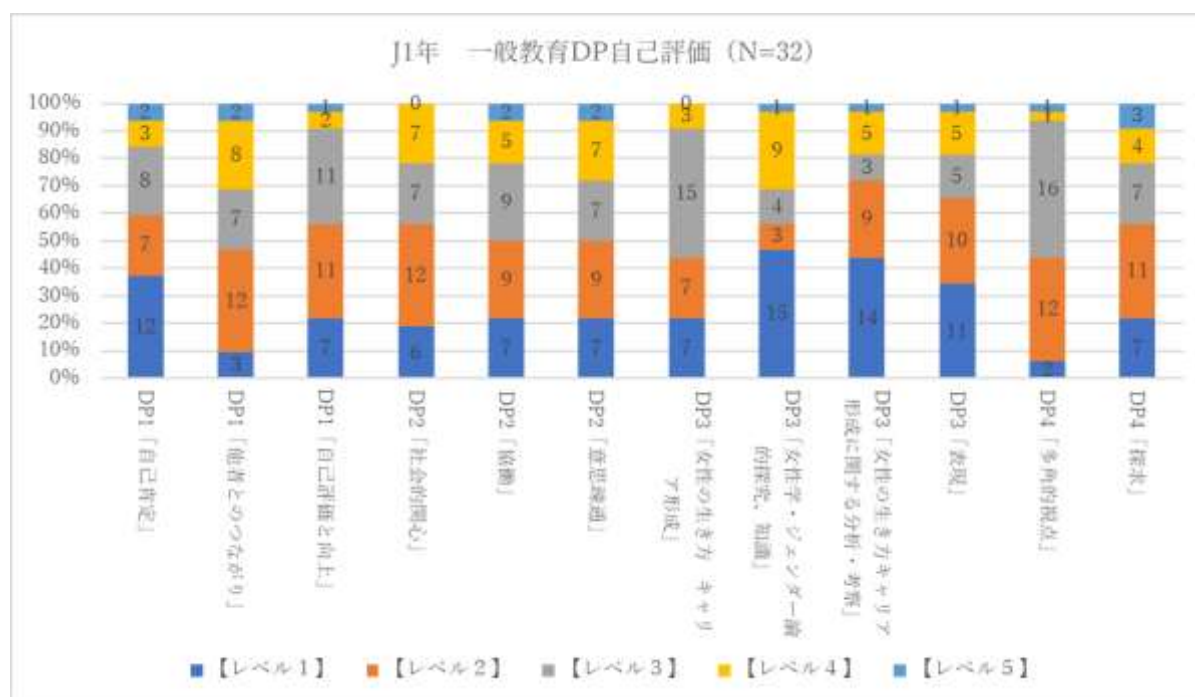
DP2 共生社会の諸問題に対して、他者と協働して解決に取り組むことができる。

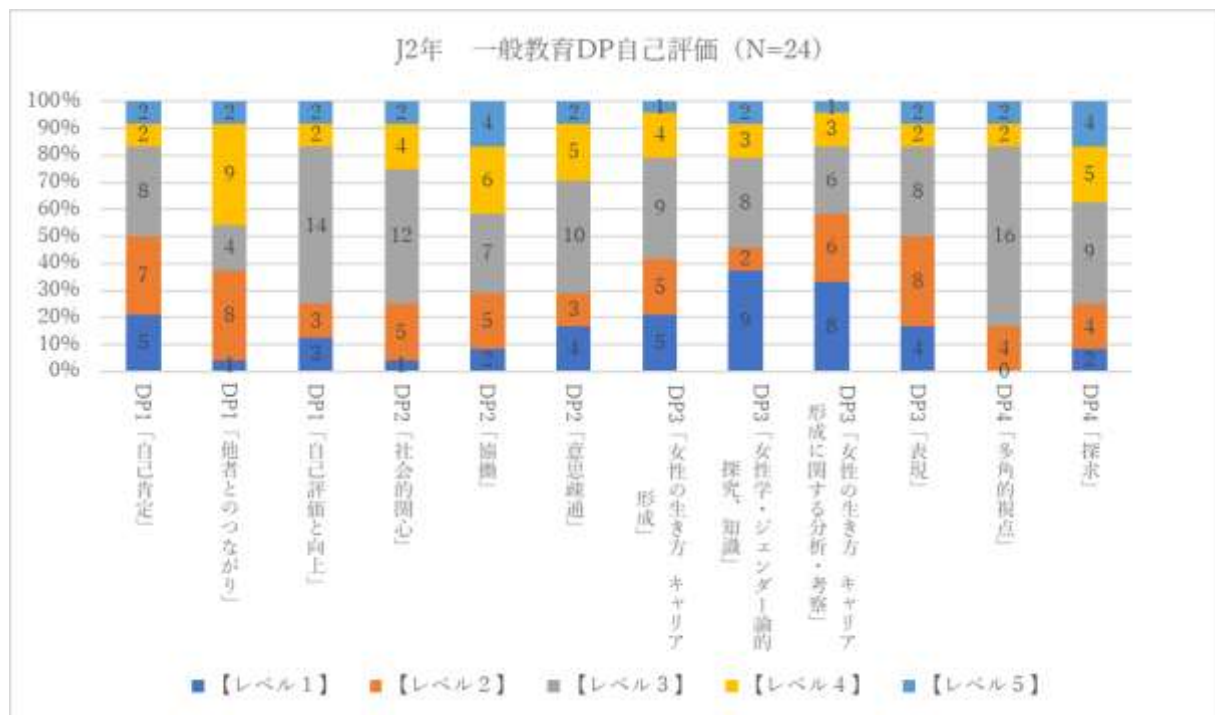
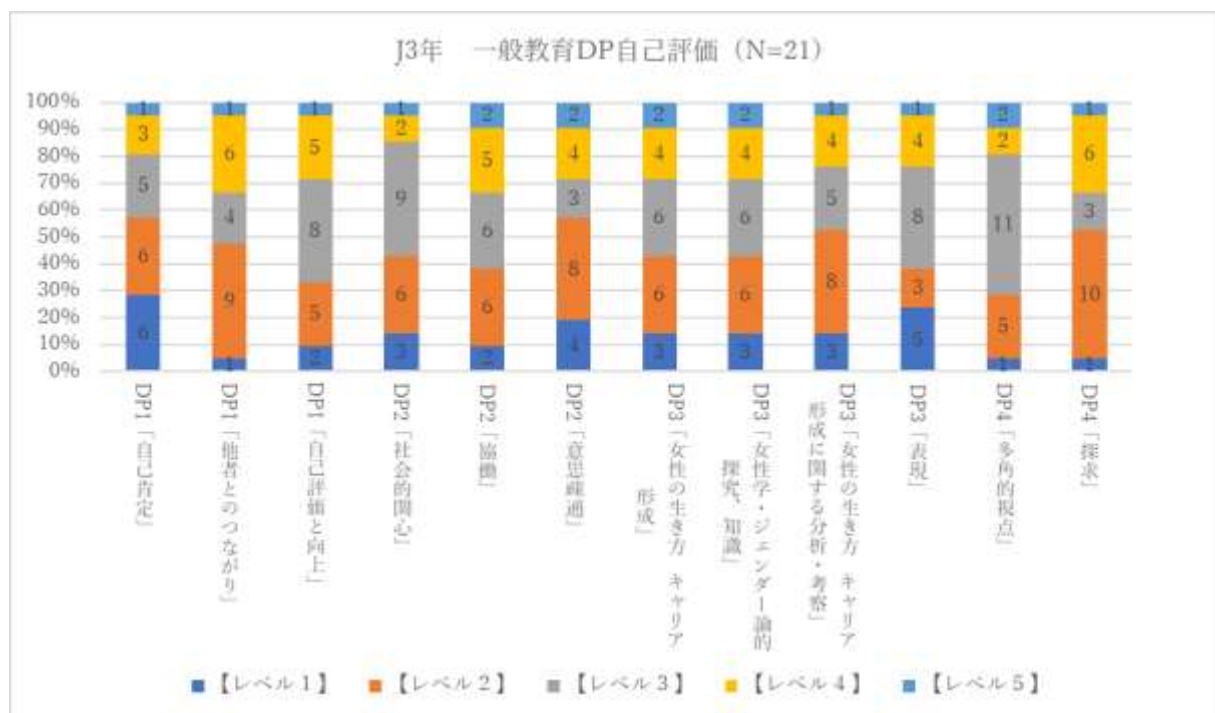
DP3 女性のキャリア自らの女性としての将来像を描き、主体的にキャリアを構築することができる。

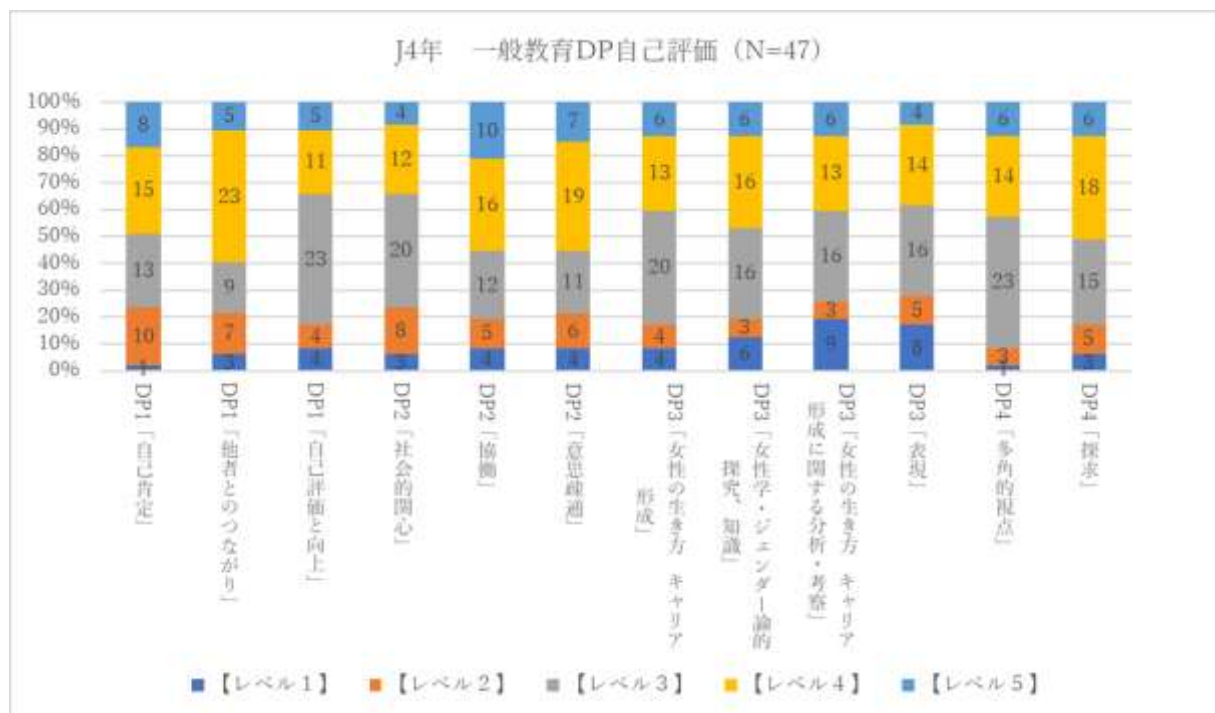
DP4 リベラルアーツ幅広い教養を自らの専門性と連携させて、正解の見えない課題に取り組むことができる。

所見

学年によって回答率にばらつきがあるため一概には述べられないものの、全体的には学年があがるごとに【レベル1】【レベル2】が減少傾向にあり、学修成果の実感が積み上がっていることがわかるが、いずれの項目も4年次における【レベル4】【レベル5】評価割合が高くて6割にとどまっておらず、卒業までに十分な学習成果を感じるに至っていない学生が少なくないことが見受けられる。







Ⅲ 専門教育科目 DP (DP 5～DP 7)

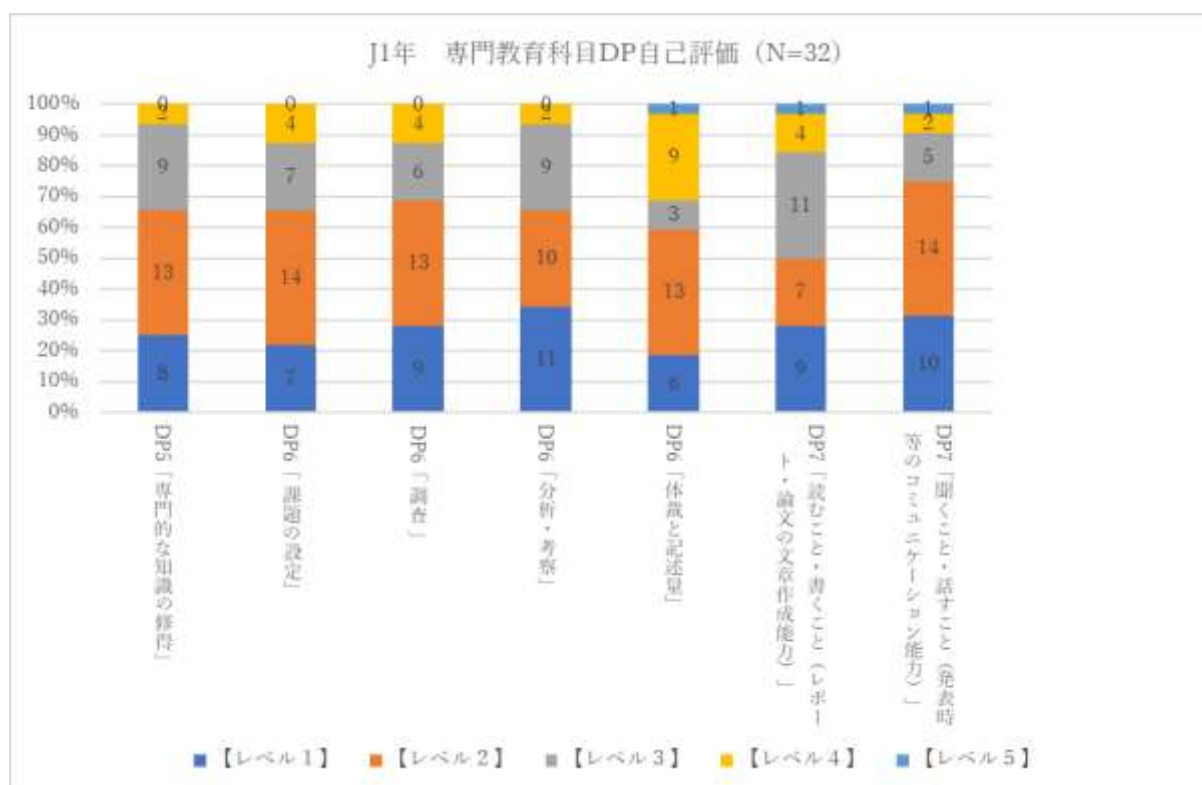
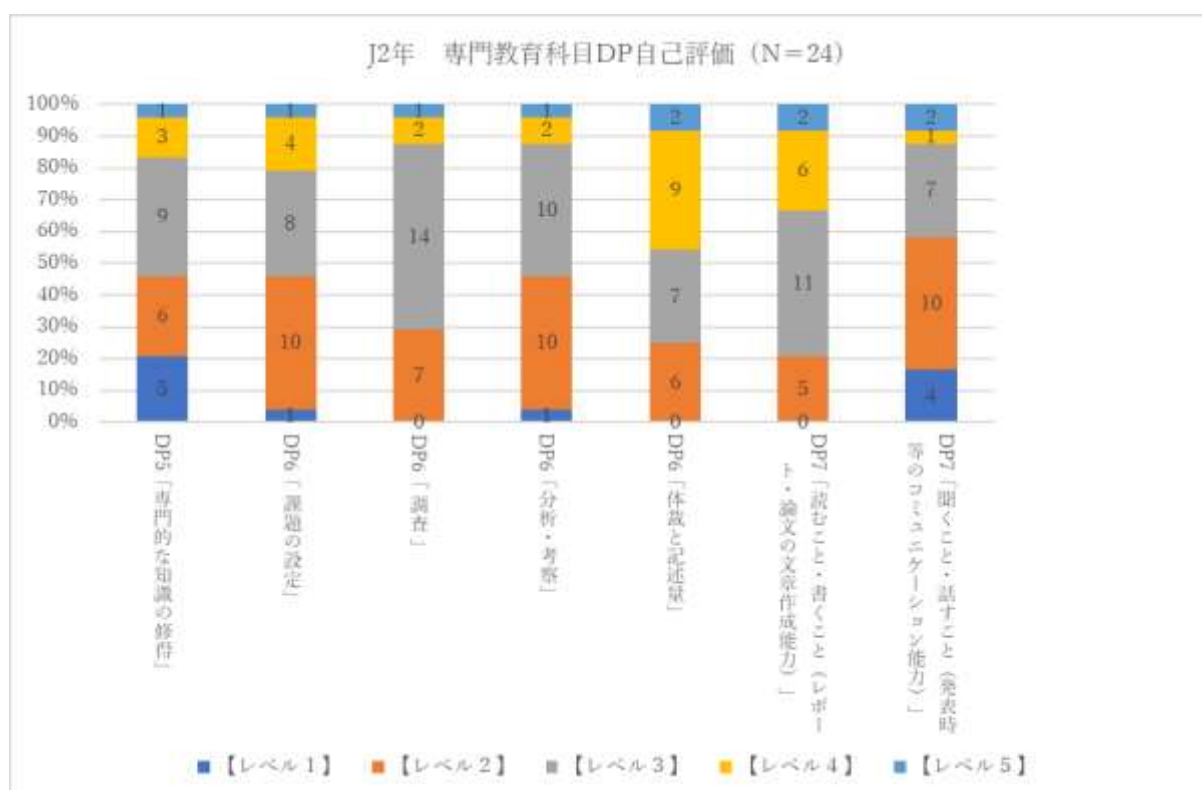
DP 5 日本のことばと文化について、専門的で体系的な知識を修得している。

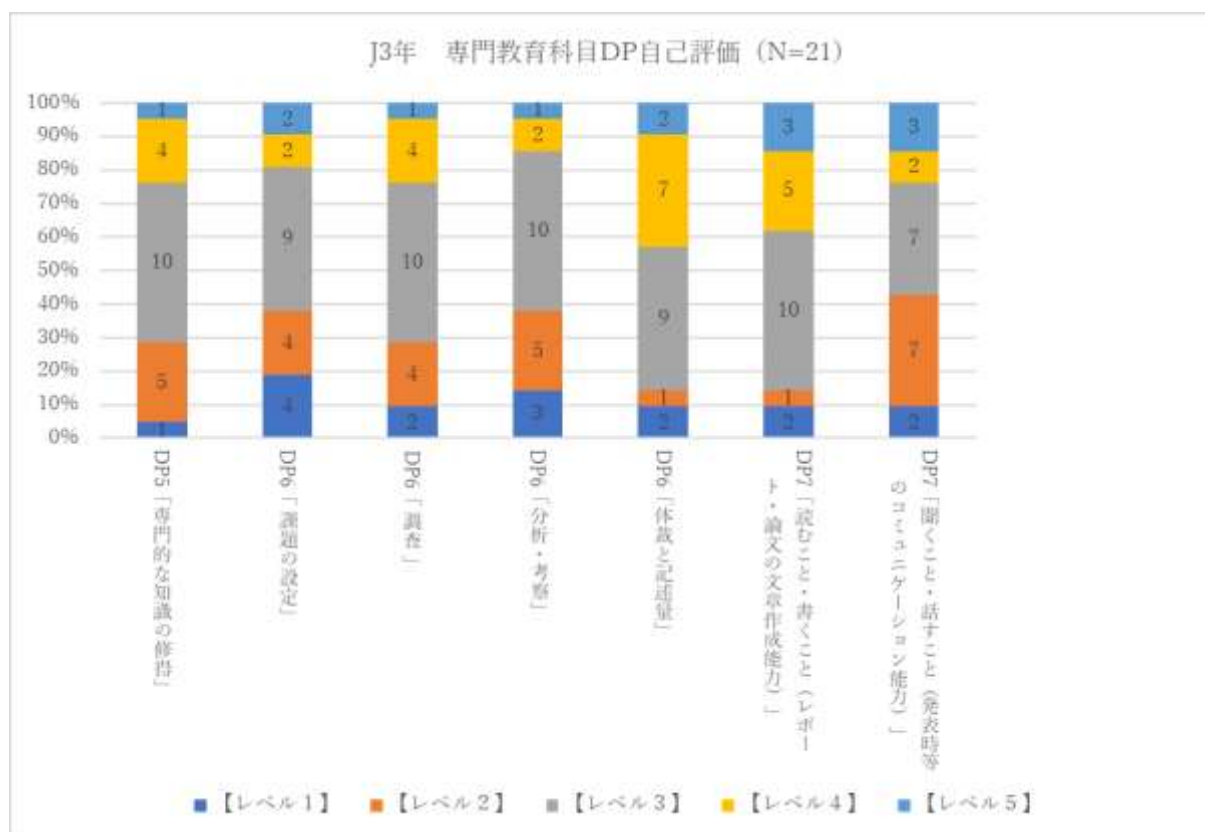
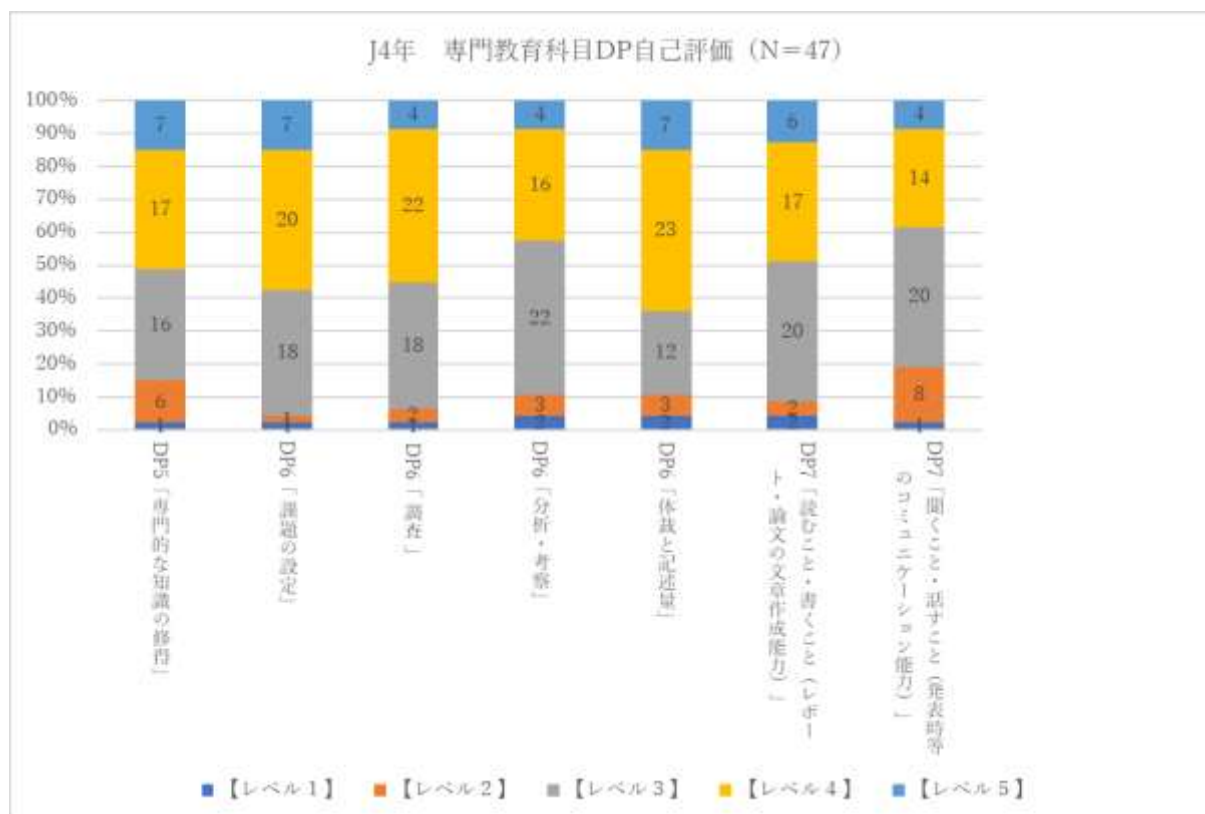
DP 6 日本のことばと文化について、自分なりに課題を設定し、適切な研究方法に基づいて調査・分析・考察を行い、最終的に首尾結構の整った卒業論文としてまとめあげることができる。

DP 7 日本のことばと文化に関する体系的な知識と深い理解に基づいて、読むこと・書くこと・話すこと・聞くこと等、言語の4技能を的確に運用し、他者と適切なコミュニケーションをはかることができる。

所見

1 年次にはいずれも【レベル1】【レベル2】が5割以上を占めているところから、学年が上がるにつれ順当に低評価が減少し、4 年次には【レベル3】以上が全項目で8割以上となっている。しかし4 年生の回答において、低評価は少ない一方で【レベル5】を回答した学生はどの項目でも少なく、【レベル3】が想定より多い30~40%にのぼっている。前回2023年度の結果と比較しても高評価帯(【レベル4】【レベル5】)の伸びがやや弱く、こちらで期待する自己評価に至らない学生が、専門教育科目でもやはり一定数いることがわかった。項目別に見ると、DP7のうち「聞くこと・話すこと」の自己評価がやや低い傾向がある。カリキュラム上もDP7に紐づけられている科目は卒業論文と一部の実習・実技系科目に留まり、学生の自己表現の機会を授業等を通してどのように設け、指導するかが学科としての課題の一つである。





・本調査の概要

本調査は本学科在籍者のディプロマ・ポリシー（以下 DP）の学年度末における到達状況を自己評価によって確認する目的で、2026 年 3 月に Google Form を用いた五件法（五段階評価）方式で実施された。授業期間には当たらなかったため、学務情報システム（UNIPA）と学修管理システム（Teams）で回答の呼びかけを行ったほか、4 年次生に対しては、3 月 19 日の卒業式において QR コードを印刷した用紙を配布して回答を依頼した。

結果として、英文学科（2026 年 4 月より英語文化コミュニケーション学科）の学生 39 名（4 月 2 日時点）からの回答を得た。回答者の学年内訳は 1 年生 11 名、2 年生 11 名、3 年生 7 名、4 年生 10 名であった。本調査では 7 つの DP に関する 17 の設問が設定された。DP1～4 は他学科と共通であり、DP5～7 は専門教育科目における学修を念頭に学科独自で設定したものである。

・回答結果の分析

回答率としては全学生の 2 割以下に留まっており、ここから在籍者全体の傾向を把握することは難しい。ただし、1 年次生から 4 年次生までの学生に同一内容の質問を投げかけた調査であったことをいかし、項目ごとに各学年の回答傾向がどのように変化するかを検討したところ、いくつかの興味深い傾向を観測することができた。

まず DP1～4 と DP5～7 で回答傾向の相違が見られた。各設問においてはレベル 1 が「大学入学レベル」、レベル 5 が「大学教育を超えるレベル」とされ、数字が大きくなるごとに到達レベルが高くなるような設定がなされていた。したがって素朴には、学年が上がるごとにレベル 1 やレベル 2 の回答が減少し、その代わりにレベル 4 やレベル 5 の回答が増えることが期待される。

しかし、専門分野に関連した知識や思考力を問う DP6 と DP7 については期待通りに学年を追うごとに回答の数字が漸次的に大きくなっていく傾向がみられたのに対し、他学科と共通の DP1～4 および英語の運用能力を問う DP5 に関しては 1 年次よりも 2 年次のほうがレベル 1 と回答する学生が増えるという傾向が観測された。ただし、今回集計したのはあくまでも 2026 年 3 月時点における各学年の回答状況であり、ある特定の学年・学生の変化を経年的に追跡したものではない。従って、たまたま 1 年次の回答者のほうが、2 年次の回答者よりも自己評価が高かっただけという可能性も排除はできない。

また、これも多くの設問に共通して観測されたのは 1 年次と 4 年次において「大学教育を超えるレベル」とされるレベル 5 の回答が多くなるという傾向である。この場合も、もともとの回答母数が小さいため、1 年次の回答者の中にたまたま自己評価の高い学生がいた可能性を考慮すべきである。しかし、たとえば、DP2 の「社会的関心」や「意思疎通」、DP4 の「探求」といった項目では 1 年次の 2～3 割（3 名以上）がレベル 5 を回答しており、例外的な回答者が存在したという理由だけでは説明しづらい。これらの項目の 2 年次と 3 年次においてレベル 5 回答が皆無であるのとは対照的である。

・分析にもとづく考察

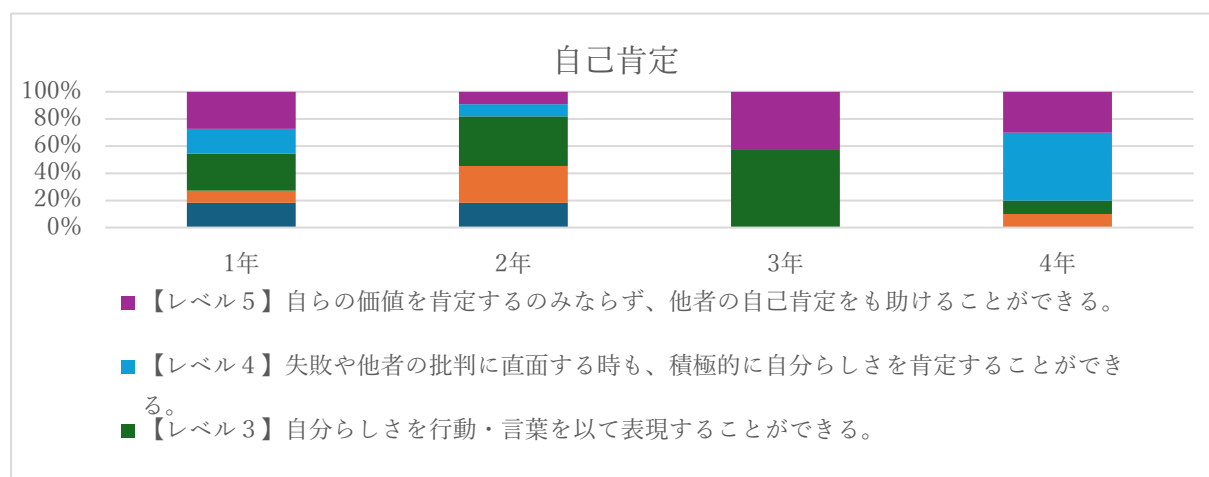
前項で述べたような傾向の理由としては、まず1年次として回答した、2025年度に入学した学生が、従来の学生と質的にやや異なるという可能性が考えられる。あくまでも一例として挙げれば、高等学校では2022年度より「知識・技能」に加えて「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」を重視することを標榜した新しい学習指導要領が実施されており、2025年度入学者は新課程のもとで高校三年間を過ごした最初の世代ということになる。この質的变化説が説得力を持つのは、次年度の学修評価アンケートにおいても、2025年度入学者の回答傾向が大きく変化せず、かつ、2026年度入学者についても自己評価の高い傾向がみられた場合だろう。

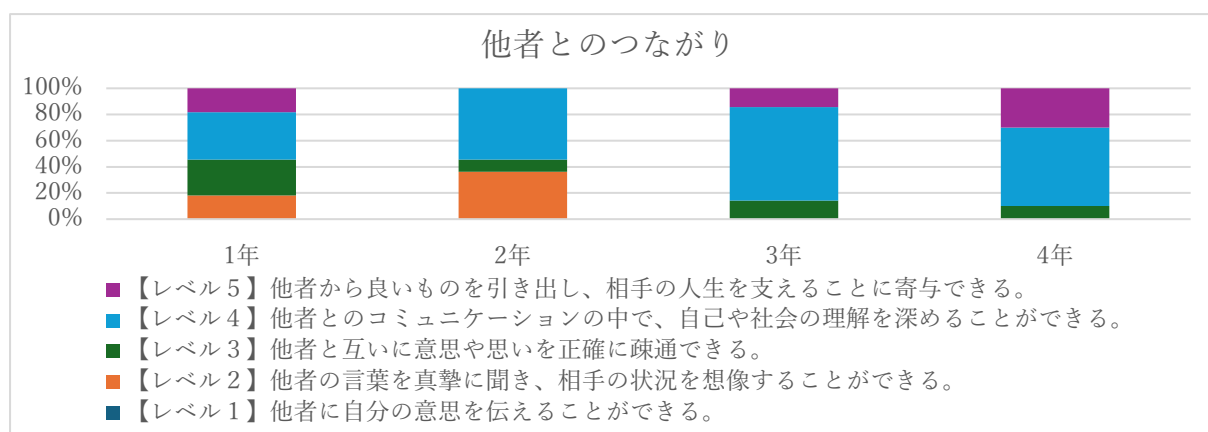
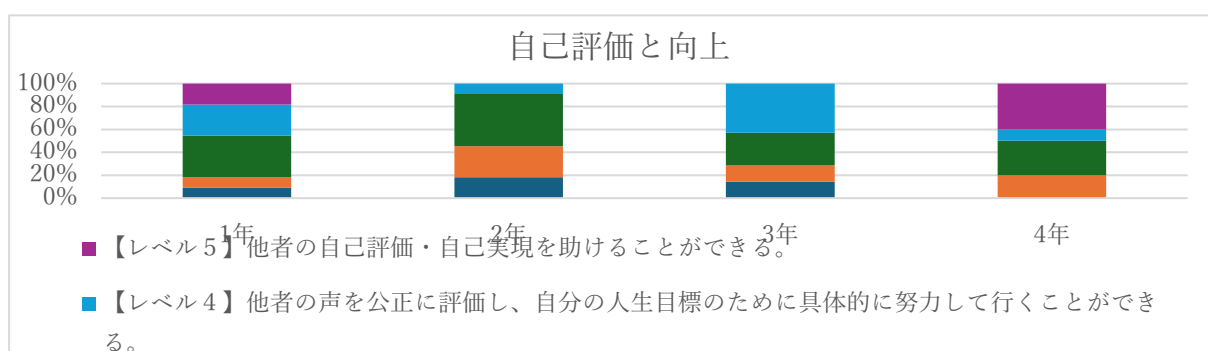
もうひとつは、五件法を用いた本調査において、1年次は見かけ上、4年次によく似た回答傾向を示すものの、それは2年次以降において、学生の評価尺度が変化（レスポンスシフト）するためであるという可能性である。次年度の学修評価アンケートにおいても、2025年度と同様に2年次で自己評価がいったん低下し、その後年次が上がるごとに漸次的に高くなっていく傾向がみられるのであれば何らかのレスポンスシフトが生じている可能性は高いといえる。五件法アンケートのような量的研究の手法だけで、評価尺度がどのように変容しているのかを知ることは難しいと思われるが、追加的に、学生を対象として半構造化インタビューのような質的研究の手法を用いてレスポンスシフトの実態を調査することで、学生目線での大学での学び・生活の意義を明らかにすることができるかもしれない。

以上、ふたつの仮説を述べたが現状ではいずれも仮説の域を出るものではない。同一方式・内容による調査を継続して経過をみること、かつ回答率の向上をはかるなかで仮説の検証・修正を行っていくことが望ましい。

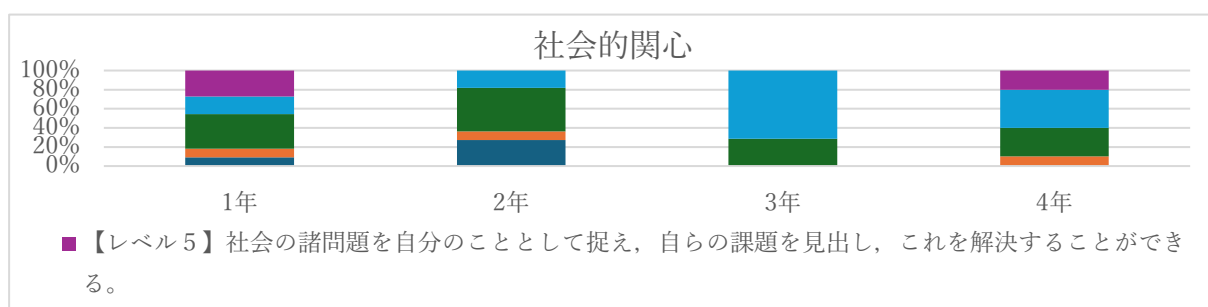
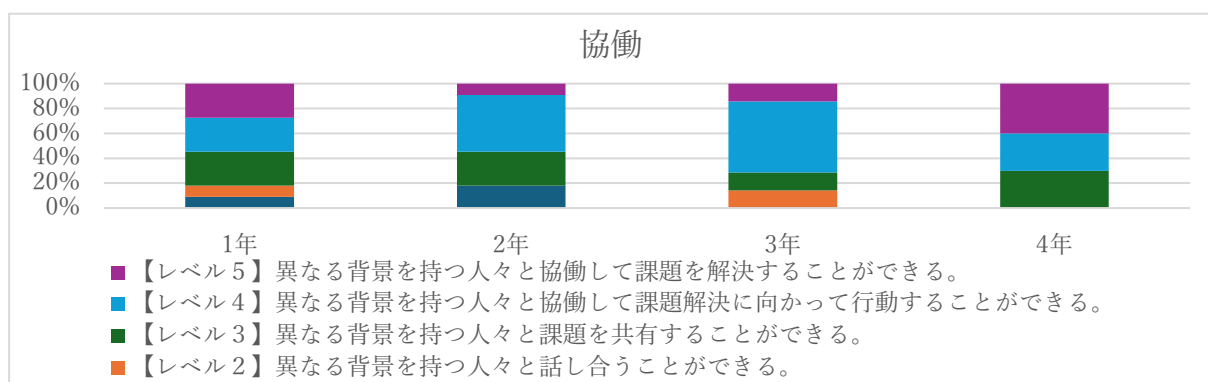
以下に回答の集計結果をまとめた積み上げ式棒グラフを付す。

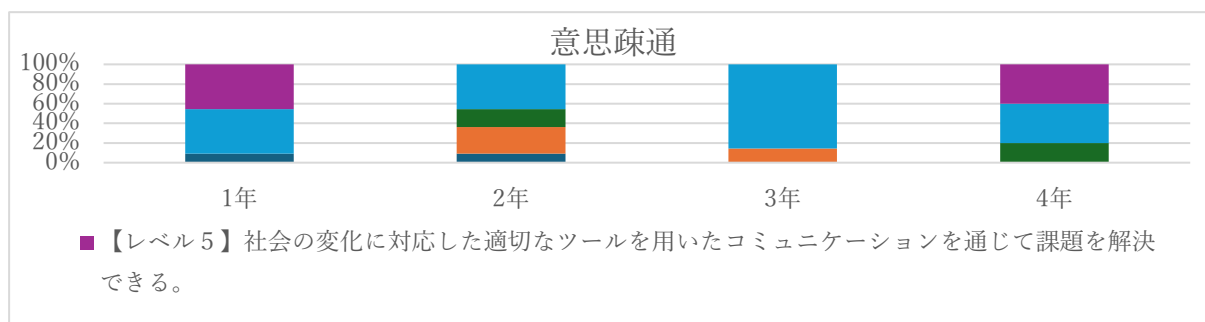
DP1. 自己受容自らの価値に肯定的に向き合い、他者との関係の中でその理解を深め、高めることができる。



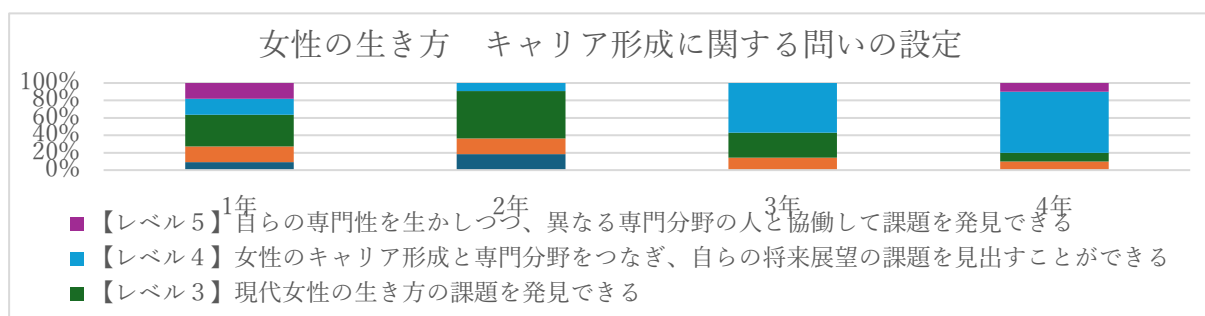
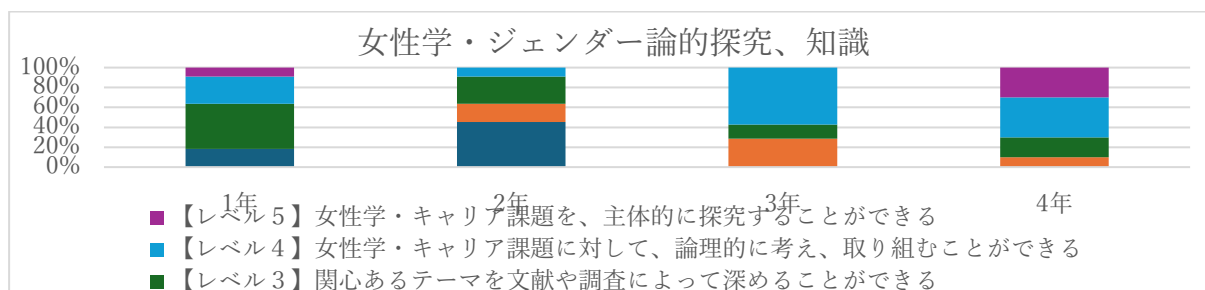
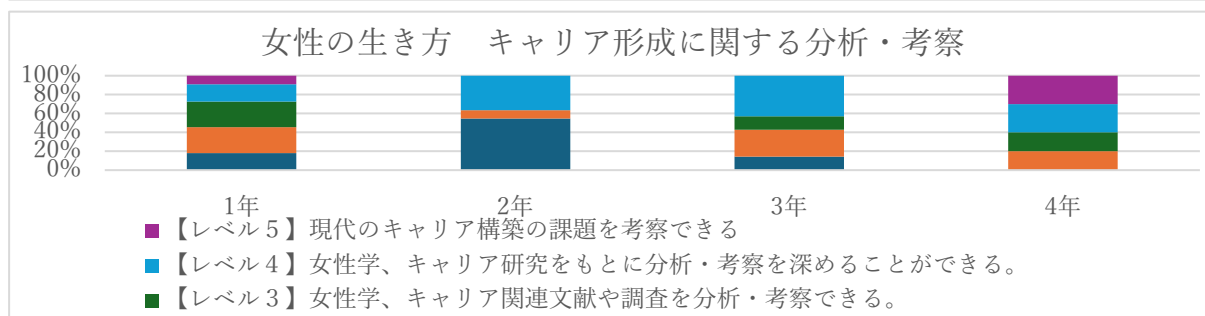
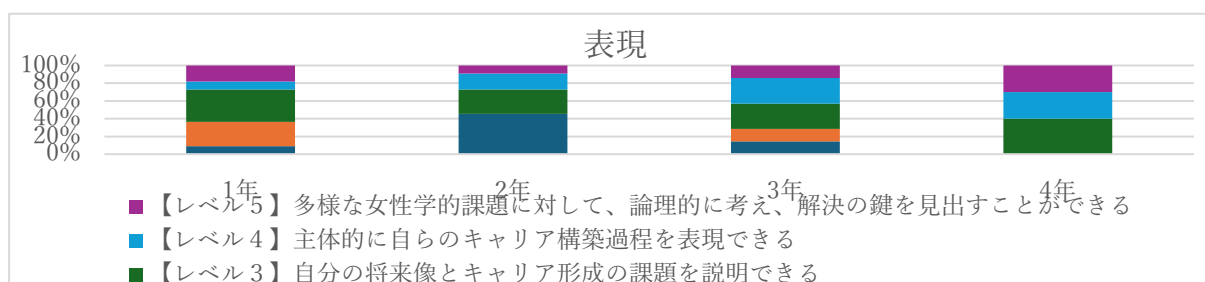


DP2. 共生社会の諸問題に対して、他者と協働して解決に取り組むことができる。

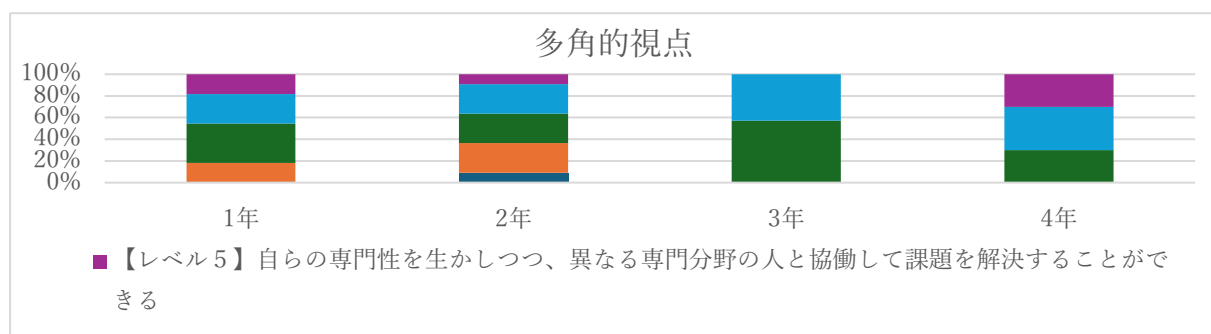
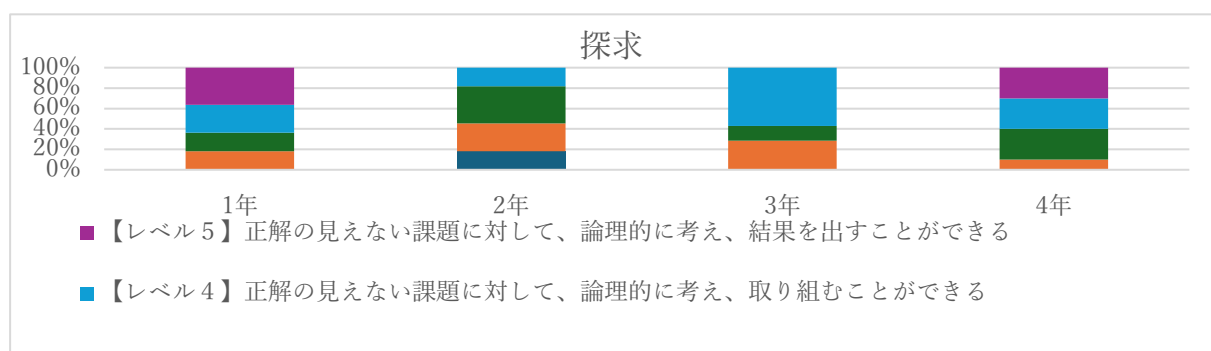




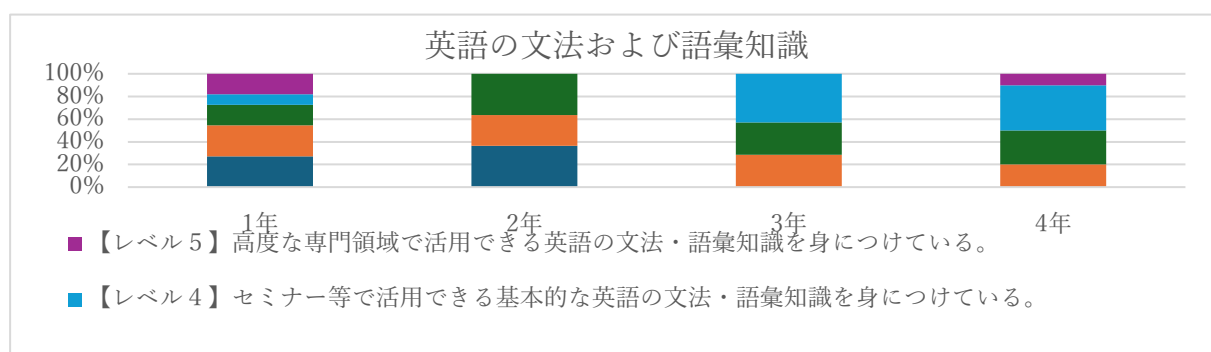
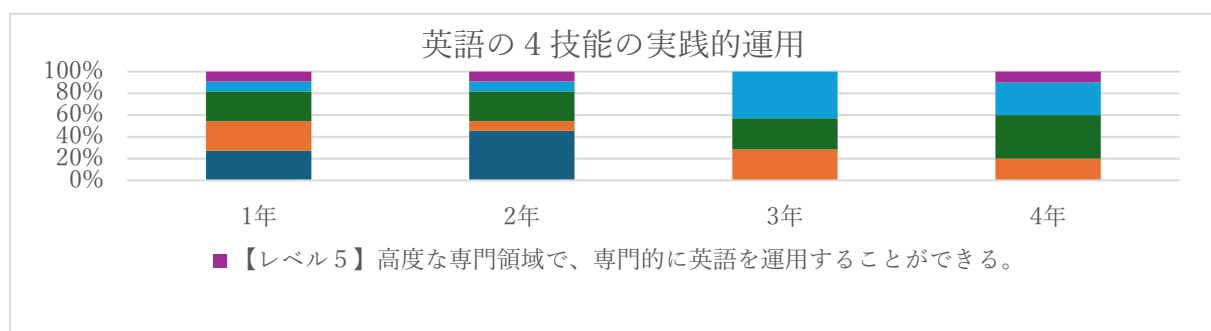
DP 3. 女性のキャリア自らの女性としての将来像を描き、主体的にキャリアを構築することができる。



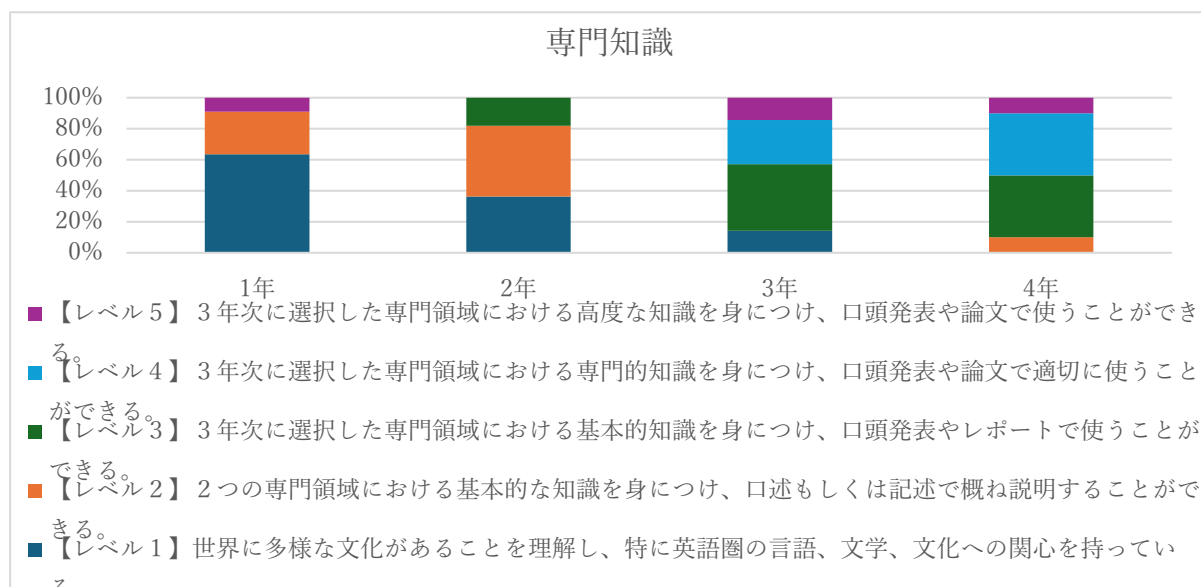
DP4. リベラルアーツ幅広い教養を自らの専門性と連携させて、正解の見えない課題に取り組むことができる。



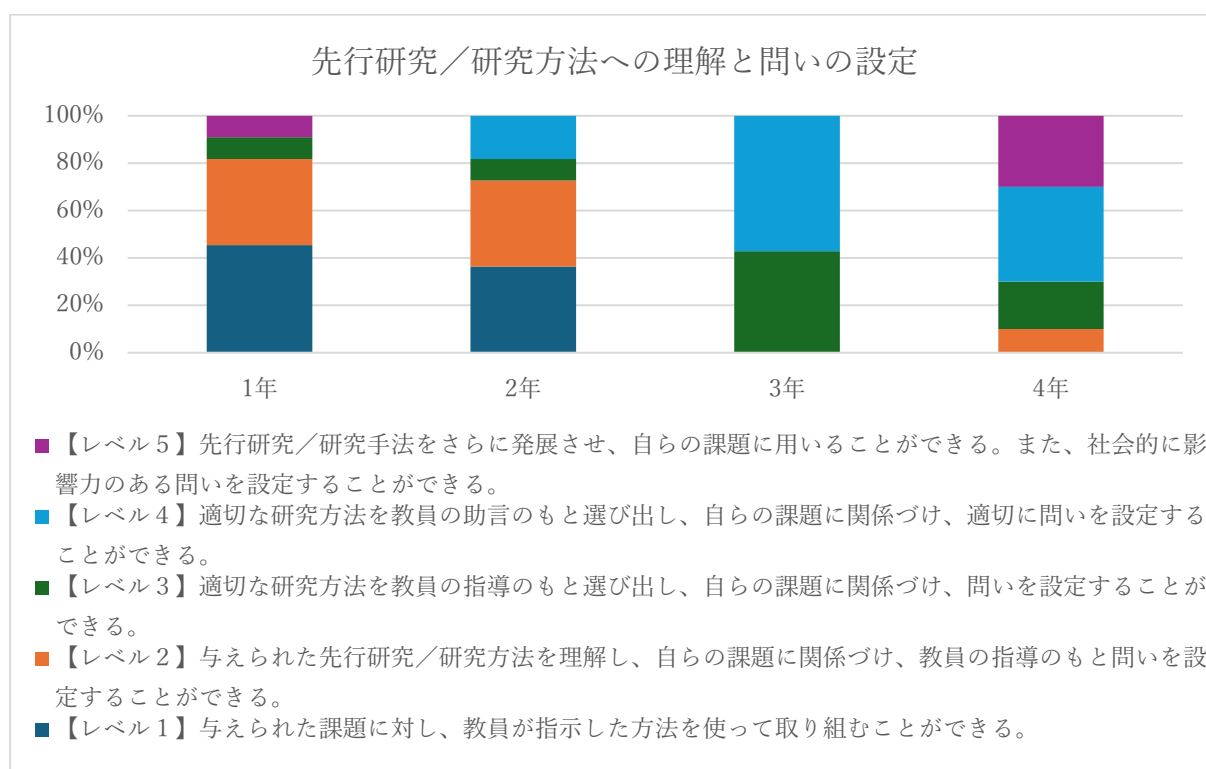
DP5. English Skills 英語力：英語の文法・語彙知識を身につけ、聞く・話す・読む・書くという4つの技能を実践的に運用することができる



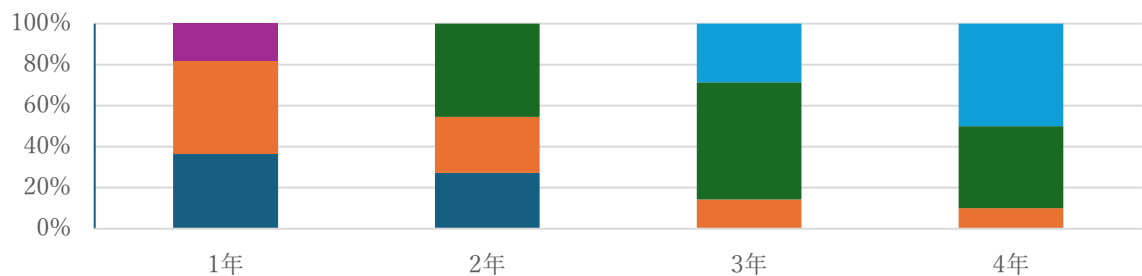
DP6. Knowledge 専門知識：英語学コースにおいては、英語の音声・構造・意味を広く深く理解するための知識及び英語教育に関する専門知識を身につけている。英米文学・文化コースにおいては、英米の詩・小説・演劇・批評や文化を広く深く理解するための知識を身につけている



DP7. Thinking&Analysis 思考力と分析：専門領域の学修を生かして、主体的に問を設定し、その問に対して粘り強く問題点を分析し考察することができる



資料収集・分析・考察と、発表



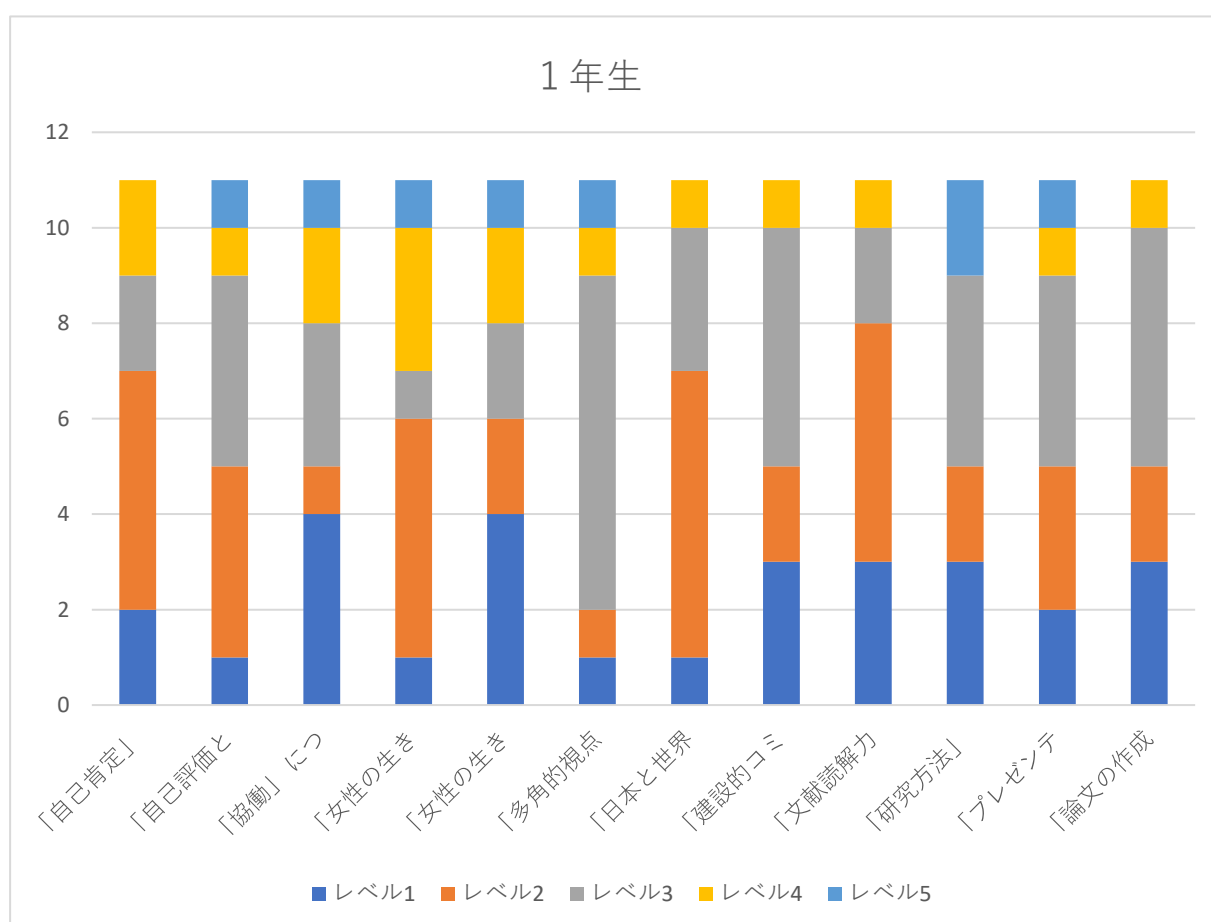
- 【レベル5】主体的に情報収集・分析・考察をし、社会的問題解決に役立てることができる。また、社会的に影響のある発表（口頭や記述）をすることができる。
- 【レベル4】主体的に情報収集・分析・考察をし、質・量ともに的確な発表（口頭や記述）をすることができる。
- 【レベル3】概ね主体的に情報収集・分析をし、内容的に的確な発表（口頭や記述）をすることができる。
- 【レベル2】教員の指示に従って適切な資料収集と分析をし、概ね内容的に的確な発表（口頭や記述）をすることができる。
- 【レベル1】教員の指示に従って資料収集し、その内容を説明することができる。

<1年>

人間文化学科1年生のDP項目に対する自己評価は下の表の通りである。今回の回答数は11人、回答率は33%であり、学科全体の状況を正確に表しているとは言えない。

各項目について、まず一般教育科目をみると、DP1ではレベル2、DP3、DP5ではレベル1、DP4ではレベル2・4の割合が高くなっており、各項目に対する関心や問題意識の高さは確認できるものの、自己評価は低いことが明らかである。

学科固有のDP項目に関しては、DP6「柔軟な思考とコミュニケーション力」の「調査力・検索力」、DP7の「研究方法」「プレゼン」「論文作成」で自己評価レベル3以上の学生が50%を超えており、自己評価が高いことがわかる。1年生にしては数値が高いように見えるが、アンケートに答えた学生たちの評価が高かったに過ぎないかもしれないので一概にはいえない。

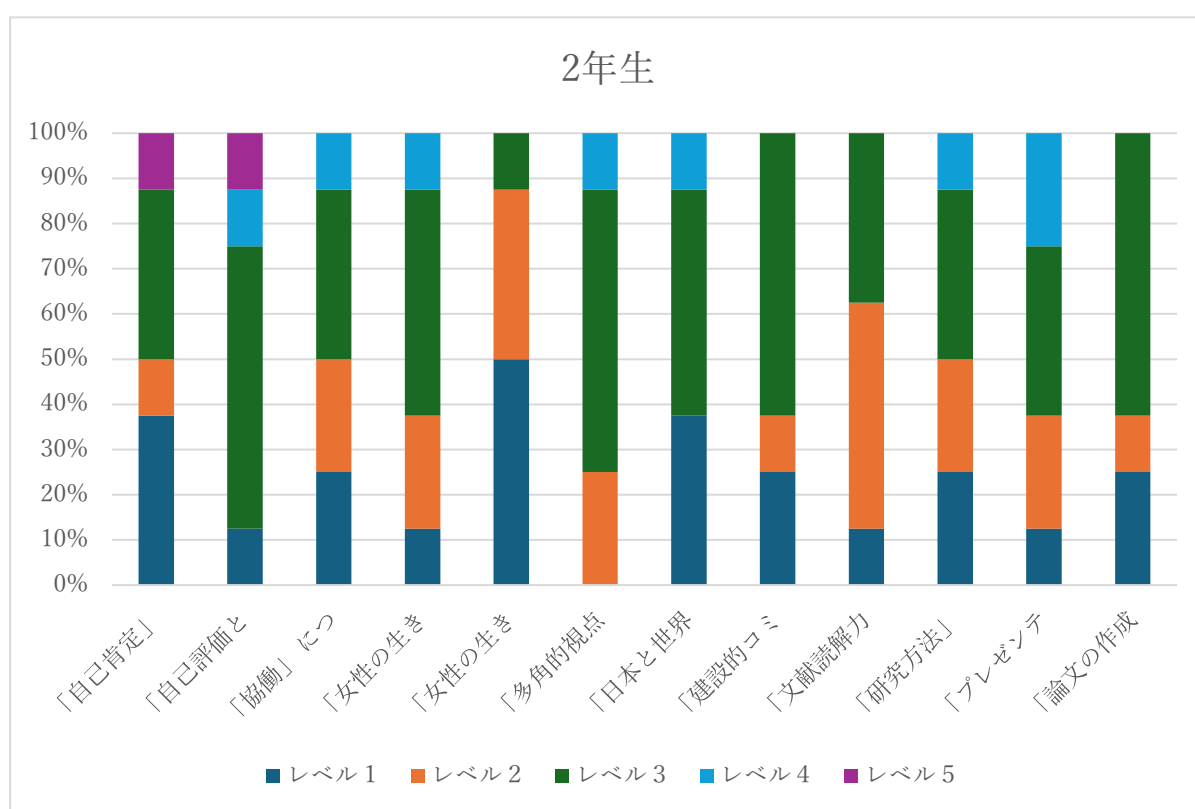


<2年>

人間文化学科2年生のDP項目に対する自己評価は下の図の通りである。今回の回答数は8、回答率は12%程度であり、学科全体の状況を表す結果とは言い難い。

各項目について、まず一般教育科目をみると、DP1の「自己肯定」「自己評価」でレベル5の学生が4いるほかは、いずれの項目もレベル4・5の学生はわずかであり、とくにレベル3の学生が多くなっている点が特徴である。

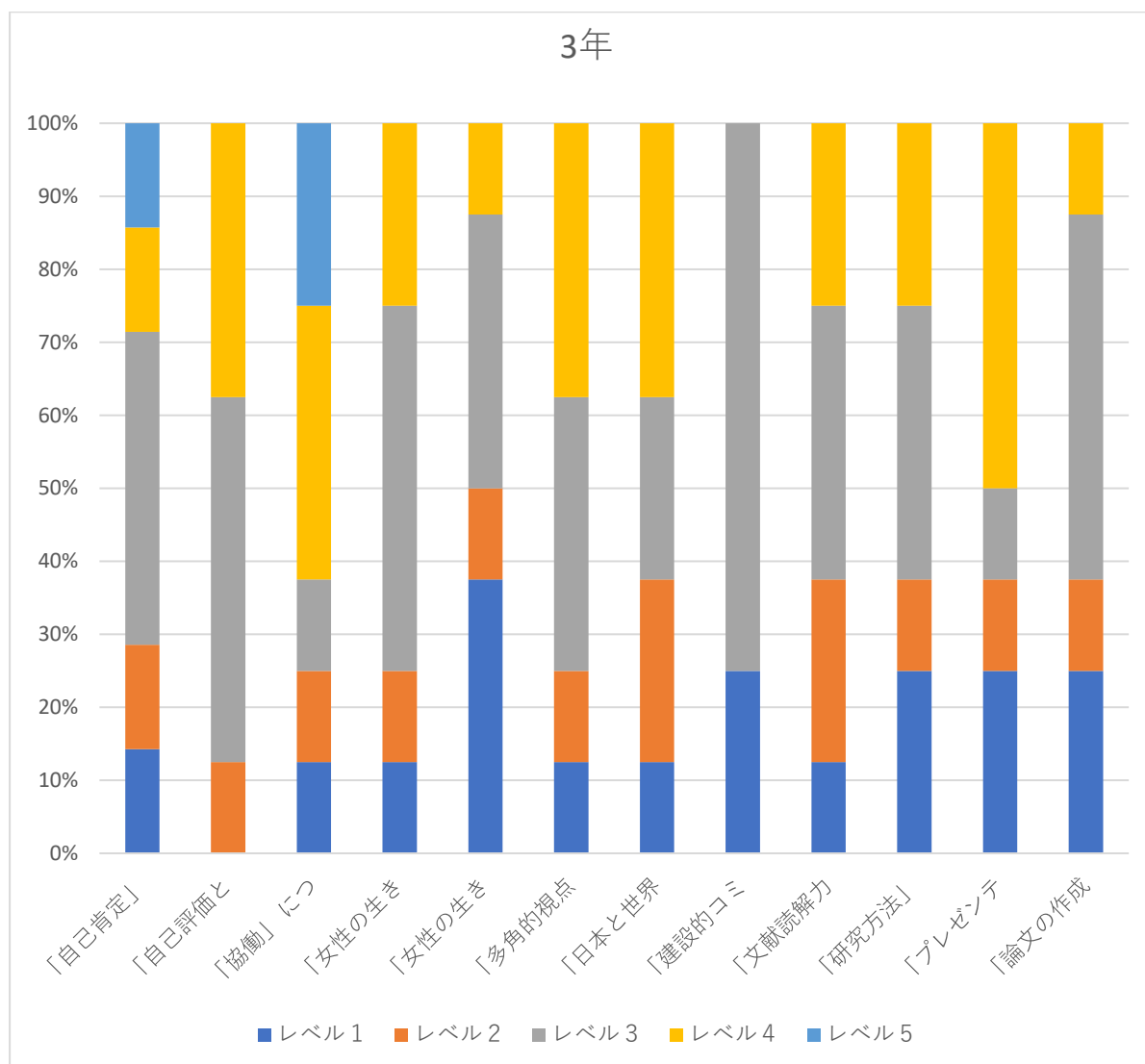
学科固有のDP項目に関しては、DP6「建設的コミュニケーション力」「文献読解力」「資料・外国語文献読解力」、DP7の「論文の作成」でレベル4・5の学生が0%となっているなど、自己評価が総じて低いことがわかる。



<3年>

人間文化学科3年生の各項目に対する自己評価は図表3の通りである。今回の回答数は8、回答率は25%であり、学科全体の状況を表す結果とは言い難い。

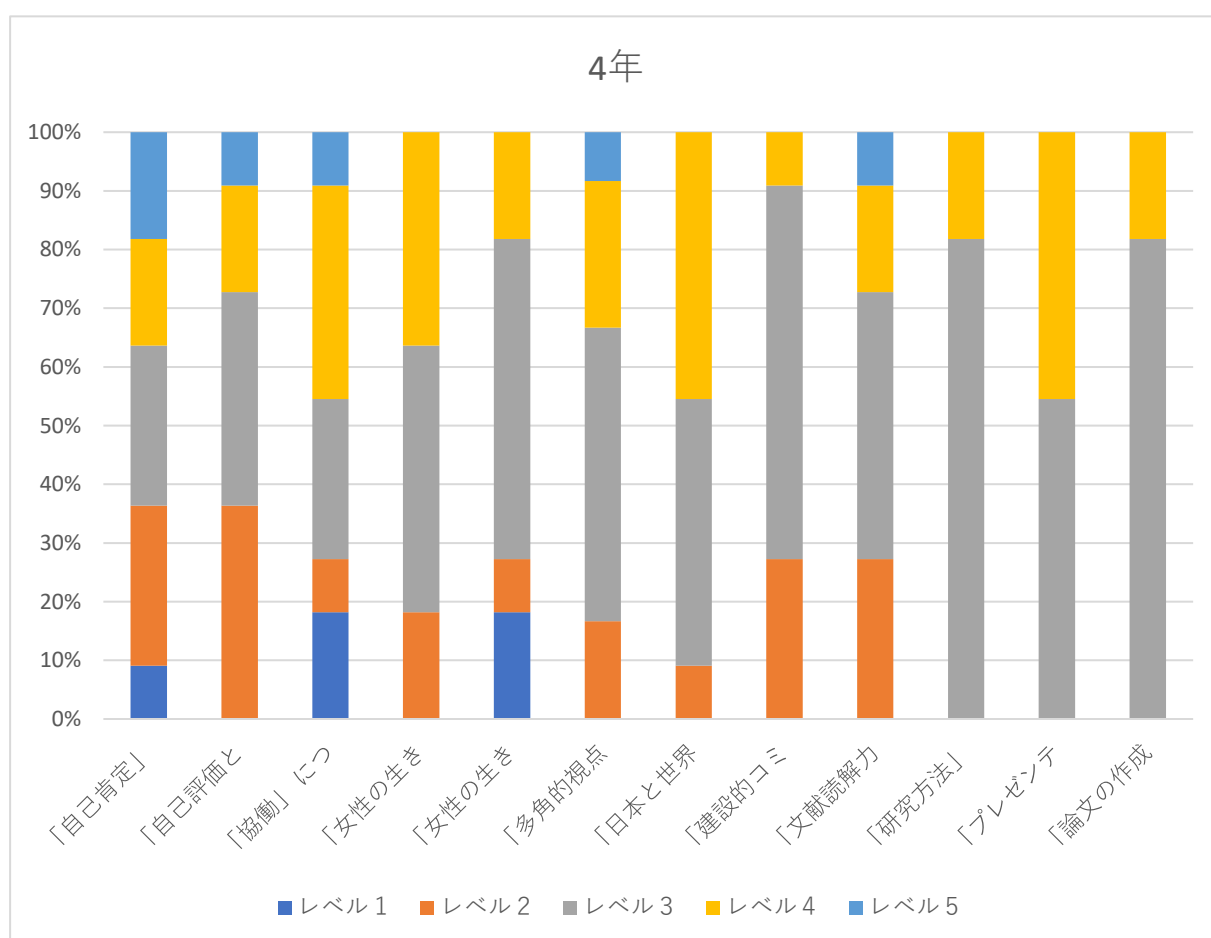
いずれの項目においても、レベル3以上とする学生が半数を超えており、総じて高い自己評価が確認できる。とりわけ、一般教育DP3「協働」と学科独自のDP7「プレゼンテーション能力」では半数以上がレベル4以上で、高い自己評価がみてとれる。



<4年>

人間文化学科4年生の各項目に対する自己評価は下の図の通りである。今回の回答数は11、回答率は22%であり、学科全体の状況を正確に表しているとは言えない。

いずれの項目においても、レベル3以上が過半数を占め、総じて高い自己評価が確認できる。その反面、一般教育DP1「自己肯定」DP5「女性の生き方」でレベル1と評価した学生がいるのは少々気になる点ではある。また、学科独自のDP6のすべて、DP7の「文章読解力」でレベル2をつけた学生がいるということは問題である。この項目をある程度身に付けさせた上で学位を与えるにはどうしたら良いか指導方法を工夫することが今後の課題であろう。



<総括>

学年が上がっていくにつれ、評価もあがる傾向は一定程度見られた。ただ、「自己肯定」「自己評価」「建設的コミュニケーション力」などで1・2をつけている学生がみられるのは気になるが、これらは学科教員の力ではできることが限られているので難しい。4年で文章読解力において2をつけている学生がいるのは「人間文化学科」という学科の特性上問題であるが、それでも学年があがるにつれ評価が高くなる傾向があるので教育の効果はあったということか。「人間文化学科」が本を読むことが好きな学生が選ぶ学科という先入観は捨てた方が良いのであろう。

また、大きな問題として回答率の低さがある。春休み中でそもそもユニパを見ない学生が多い。この点の改善として、年度初めのガイダンスで年度終わりのアンケートで習熟度をはかる旨を告知し、ユニパの掲示機能を使って1年中DPを見られるようにした。どこまで効果があるかは分からないが、1月最後のゼミでも全員に一か月後のアンケートに答えるよう告知しようと思っている。

心理行動科学科のディプロマポリシー（DP）をもとに作成したルーブリックを用いて、学生から回答を求めた。それぞれの学年における回答者数、回答率は以下の通りである。1年生：76名（88.37%）、2年生：80名（86.96%）、3年生：59名（77.63%）、4年生：55名（73.33%）であった。それぞれの学年の傾向について以下にしめす。

① 1年生の集計結果について

・一般教育科目

各項目の回答数を基に割合を算出すると、DP1・DP2ではレベル3を中心とした分布が多くみられる。一方、DP3ではレベル1がそれぞれ35.5%を占め、他の項目とは異なる分布を示している。DP4では「多角的視点」においてレベル3が60.5%を占め、レベル3への回答集が最も大きい（図1）。



図1：1年生 DP1~4（一般教育科目）

・専門教育科目

DP5～DP8では、DPごとに異なる回答分布がみられた。DP5では項目によってレベル1・2を中心とするものと、レベル3・4に分布するものがみられた。DP6では「統計分析・結果の解釈」のレベル1が69.7%、「プレゼンテーション資料の作成」のレベル2が57.3%となるなど、項目間の差が大きい。DP7では「批判的思考力」「表現力」とともにレベル2が約半数を占めた。DP8でも3項目でレベル2が最多となった一方、「多様な立場の尊重」は各レベルに比較的分散している（図2）。



図2：1年生 DP5~8（専門教育科目）

② 2年生の集計結果について

・一般教育科目

全体として、DP1 および DP2 ではレベル 3 を中心とする項目が多く、DP3 では項目によってレベル 1～3 の分布に違いがみられた。特に DP3 の「女性学・ジェンダー論的探究、知識」と「女性の生き方 キャリア形成に関する分析・考察」では、レベル 1 がそれぞれ 35.5%を占めている。DP4 では「多角的視点」のレベル 3 が 60.5%と最も高い割合を示しており、特定のレベルへの集中がみられた。一方、「探求」ではレベル 2～4 がそれぞれ 27.0%、29.7%、27.0%と比較的近い割合となっている（図3）。

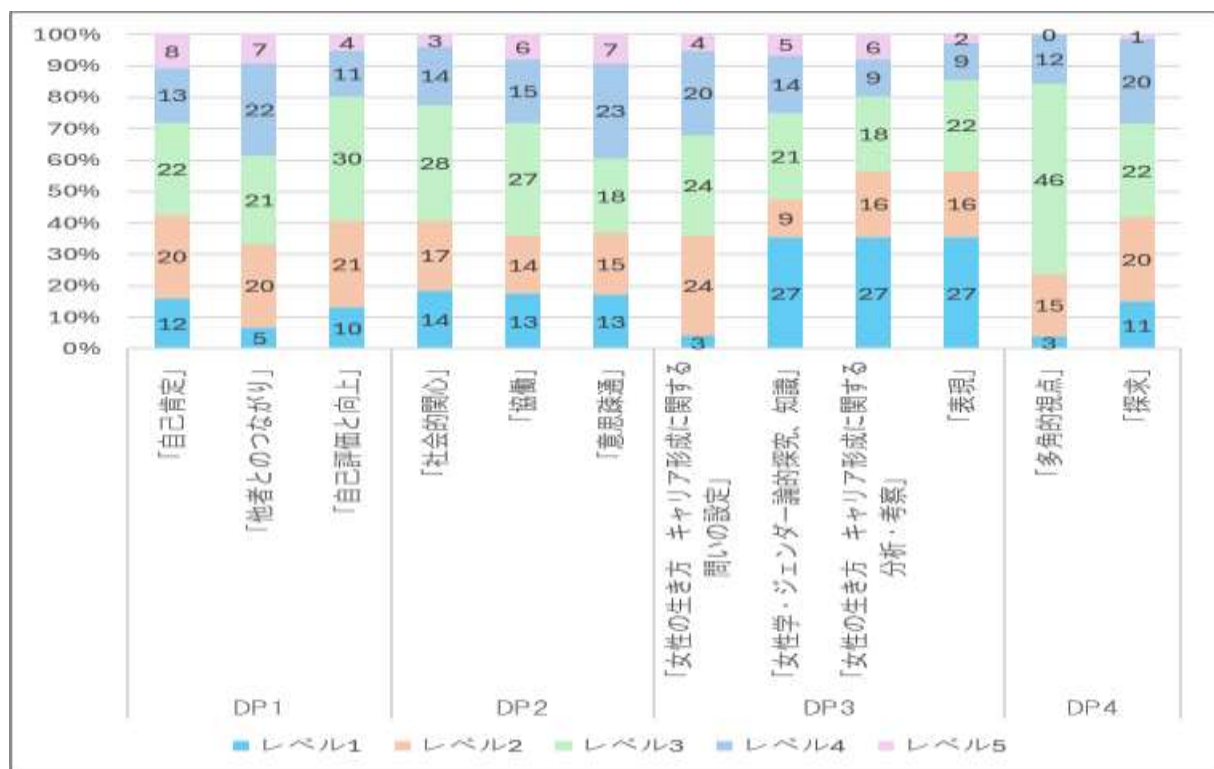


図3：2年生 DP1~4（一般教育科目）

・専門教育科目

図全体から、DP5～DP8では項目によってレベルの分布に大きな違いがみられ、特に対人関係に関する能力は比較的高い一方で、専門的な知識・研究・分析に関する能力は低いレベルに集中していることが特徴として挙げられる。例えば、DP5の「傾聴力」ではレベル3～5が64.5%、「共感力」では76.3%を占めており、DP8の「多様な立場の尊重」でもレベル3～5が73.7%と高い割合を示している。一方、「心理学的な測定方法の習得」ではレベル1・2が77.6%、「研究計画の立案・実行」では93.0%、「統計分析・結果の解釈」では86.8%を占めており、専門的な方法を用いて研究を計画・実施し、結果を分析・解釈する能力については、今後さらに学習や実践経験を積む必要があると考えられる。また、「批判的思考力」や「社会課題の発見」においてもレベル1・2がそれぞれ65.3%、61.8%を占めており、身につけた知識や対人能力を、具体的な課題の発見や分析、解決へと結び付ける点に課題があることが示唆される。以上から、今回の結果では、他者を理解し尊重するための基礎的な対人能力は一定程度身につけているものの、それらを専門的な知識・技術と組み合わせ、研究や実践、課題解決へと発展させる能力には課題が残されていると考えられる。そのため、今後は専門知識の習得だけでなく、実際の事例を用いて研究計画の立案、データの分析・解釈、ディスカッション、課題解決までを一連の流れとして経験する機会を設けることで、既に身につけている対人能力を専門的・実践的な能力へとつなげていくことが重要である。

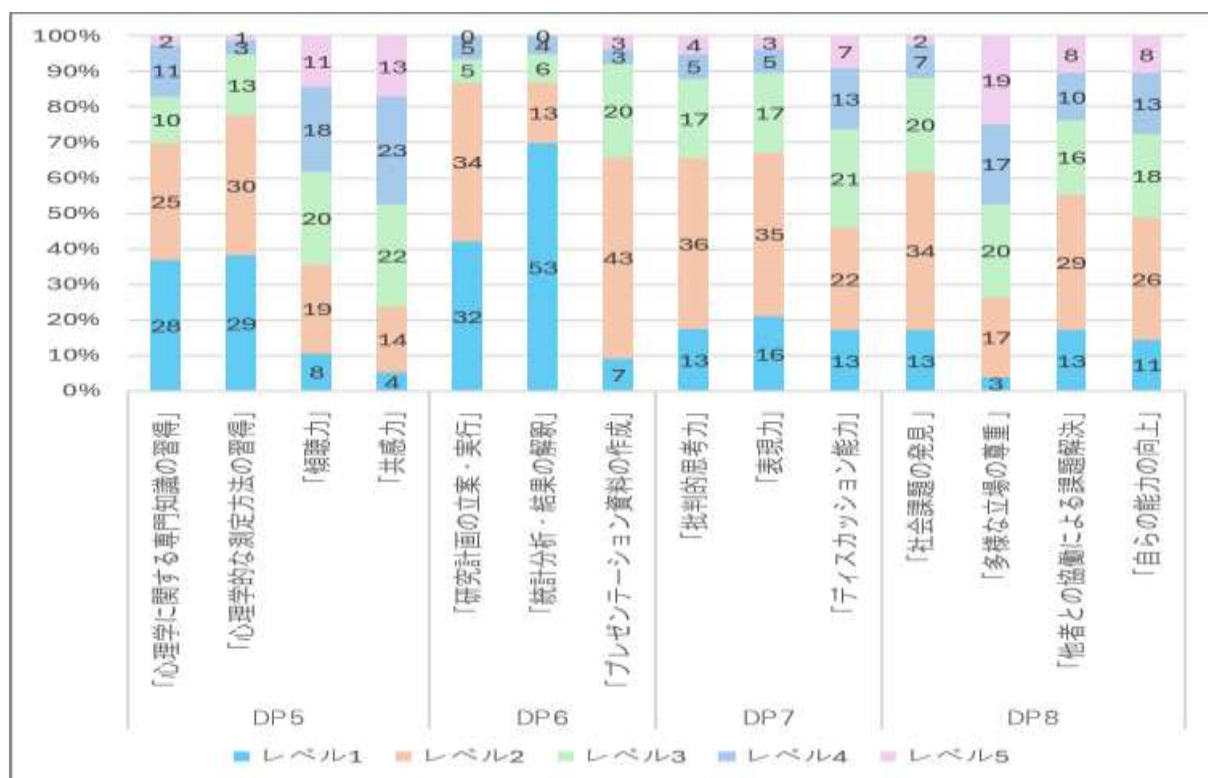


図4：2年生 DP5～8（専門教育科目）

③ 3年生の集計結果について

・一般教育科目

DP1では、「自己肯定」はレベル4が26.7%、レベル5が33.3%と比較的高く、高レベルに分布している。一方、「他者とのつながり」はレベル3が42.4%と最も多く、「自己評価と向上」はレベル4が49.2%と約半数を占めている。DP2では、3項目ともレベル3・4が中心となっている。

「社会的関心」はレベル3が40.7%、「協働」はレベル3が35.6%、「意思疎通」はレベル3が33.9%であり、レベル3・4を合わせるとそれぞれ約56～64%を占める。DP3では、特に「女性学・ジェンダー論的探究、知識」や「女性の生き方 キャリア形成に関する分析・考察」でレベル3がそれぞれ49.2%、27.1%を占める。「女性の生き方 キャリア形成に関する問いの設定」はレベル3が25.4%、レベル4が27.1%で、両者を合わせて約52%となっている。DP4では、「表現」はレベル3が27.1%、レベル1が28.8%と分布が比較的分散している。「多角的視点」はレベル2が約31%、レベル3が約21%、レベル4が約22%であり、「探求」はレベル3が約50%と突出している。全体としては、レベル3・4の割合が比較的大きく、特にレベル3が各項目で中心的な割合を占めている。一方、レベル5は概ね7～20%程度にとどまり、レベル1・2の割合には項目間でばらつきがみられる（図5）。

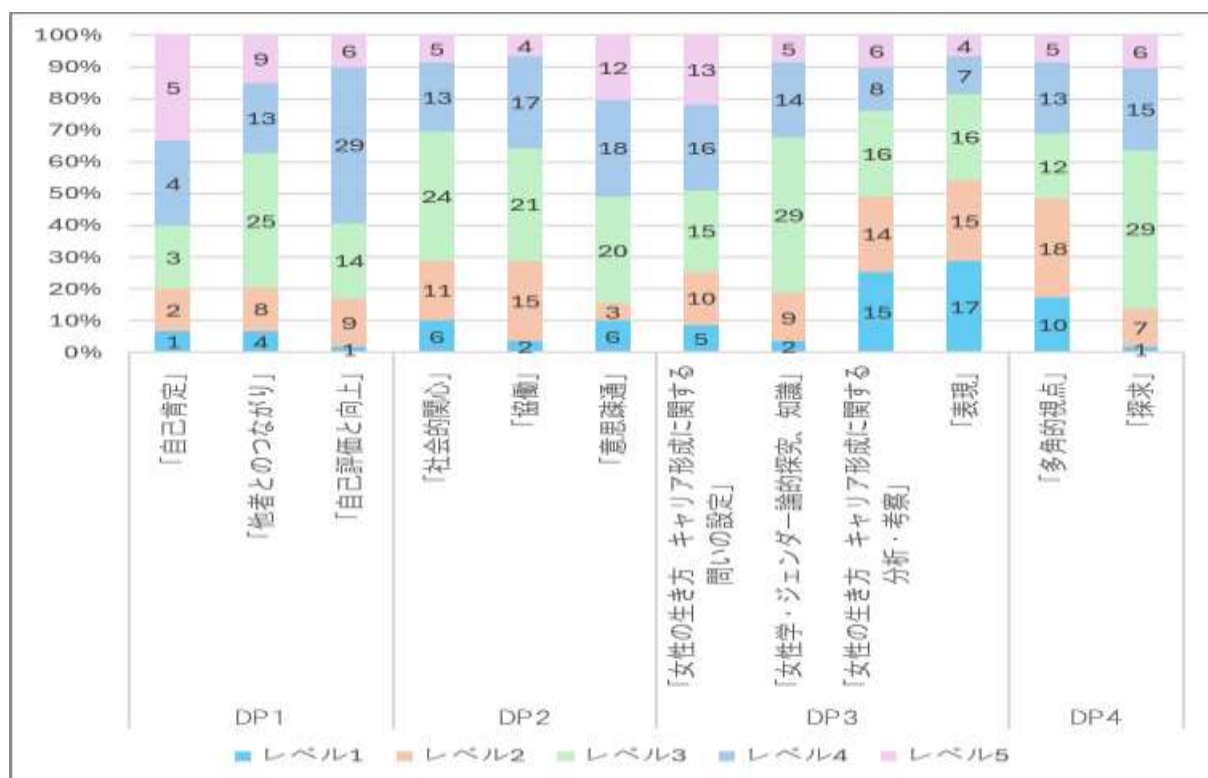


図5：3年生 DP1~4（一般教育科目）

・専門教育科目

DP5～DP8 全体では、レベル3・4の割合が高い傾向がみられる。DP5はレベル3が約4割を占め、DP6はレベル3が約4～5割と特に高い。DP7もレベル3が中心である一方、レベル2も比較的多い。DP8はレベル3・4が中心で、特に「他者との協働による課題解決」ではレベル4が約4割を占めている（図6）

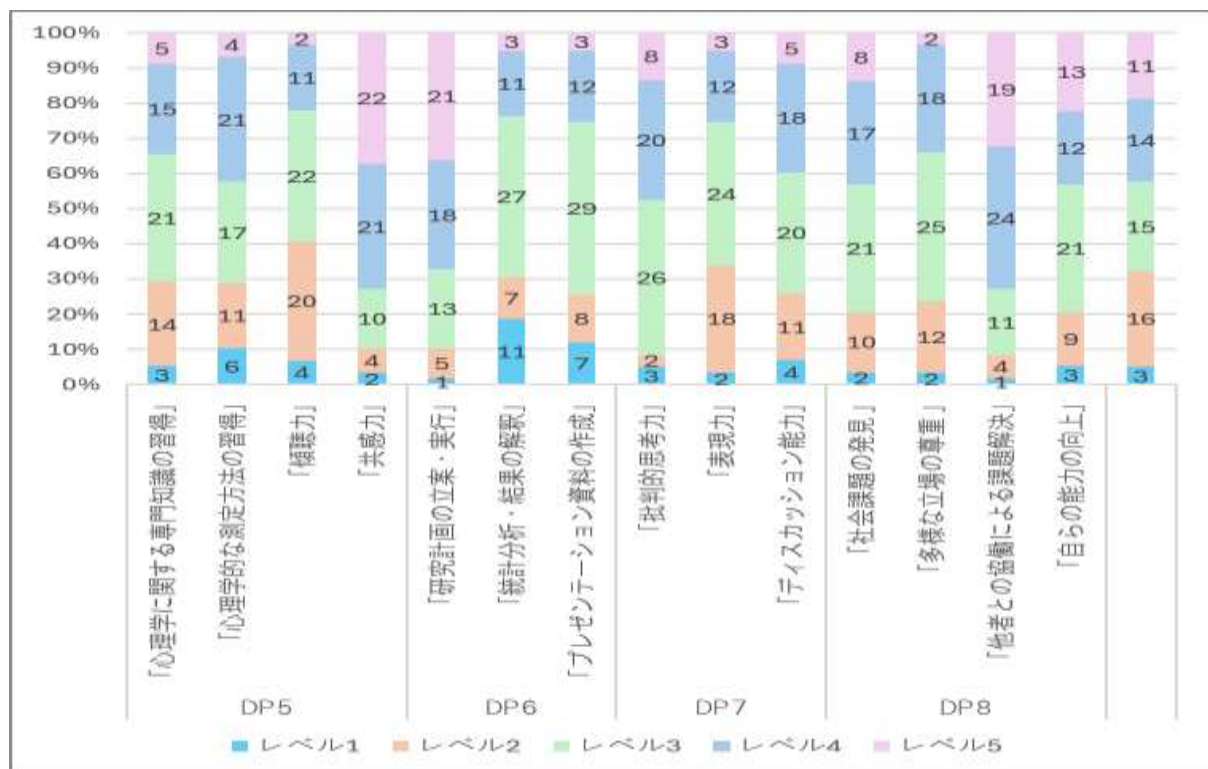


図6：3年生 DP5~8（専門教育科目）

④ 4年生の集計結果について

・一般教育科目

全体として、レベル3・4の割合が高く、特にレベル4が多い傾向がみられた。DP1ではレベル4が約33～49%を占め、DP2ではレベル3・4を合わせて約65～73%となった。DP3ではレベル3・4が中心で、特に「女性の生き方 キャリア形成に関する問いの設定」ではレベル3が約45%を占めている。DP4ではレベル3・4の割合が約77～80%と高く、全体的に高いレベルに分布していることが示された。一方、レベル1・2の割合は全体的に低く、レベル5も項目によってばらつきがみられた（図7）。



図7：4年生 DP1~4（一般教育科目）

・専門教育科目

全体として、レベル3・4の割合が高く、特にレベル4が中心となっている。DP5ではレベル4が約50%を占め、DP6ではレベル3・4を合わせて約60~70%となった。DP7ではレベル4が約40~50%と高く、DP8でもレベル3・4が中心で、特に「社会課題の発見」ではレベル4が約44%を占めている。一方、レベル1・2は全体的に少なく、レベル5は項目によって10~30%程度とばらつきがみられた（図8）。

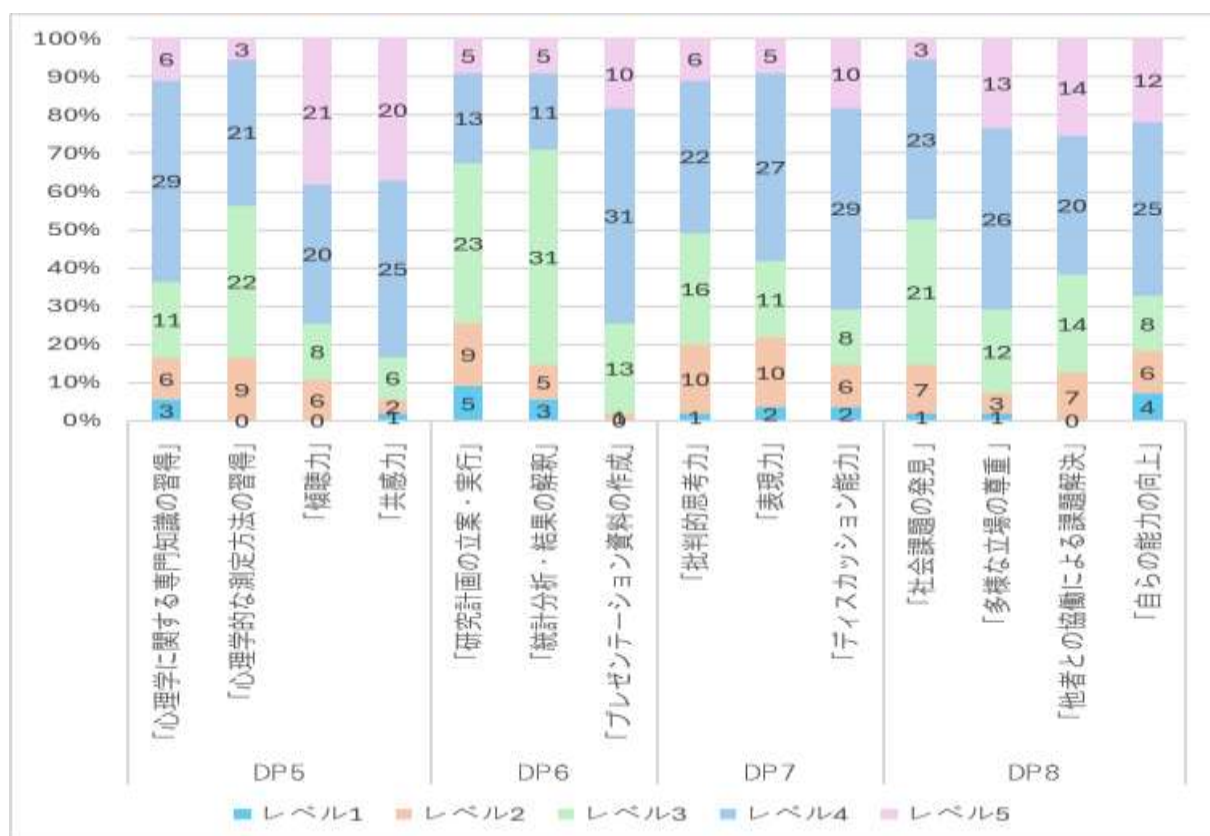


図8：4年生 DP5~8（専門教育科目）

全体的に読み取れるのは、表現についてや、意思疎通などの数値は、慣れない環境で始まった大学生活の現れであろうということ。また、女性学やジェンダーに関しては、高校生まで意識が少なかったことで、まだ未知の分野であったのかと考えられる。

その一方で、探求や多角的視点には、高いレベルも見られることから、意欲的な気持ちは非常に高いことがわかる。以上のことと、自己肯定や自己評価を合わせて見ると、今後の成長が楽しみということが言えるのではないか。

